
ばちあたりアパートメント ~ザ・ごった煮ワールド~

ベビースモーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばちあたりアパートメント ーザ・こった煮ワールドー

【Nコード】

N7720W

【作者名】

ベビースモーカー

【あらすじ】

但野 人成。自称一般人。

彼自身はたいして目立ったところのない人物であるが、彼の住んでるアパートが拙かった。

今日も今日とてとんでもない住民とご近所さんが巻き起こす大騒ぎ。ツツコミだけを武器に、人成はそれに敢然と立ち向かう！

拙作【思いつきを書き殴ってみる】から独立したシリーズです。まずはそちらから目を通して頂いた方が楽しめるかと思います。

とつじょつじんぶつ

オリキャラ
人物紹介

但野 ただの 人成 ひとなり

とあるなんだか色々な存在モノが住まうアパートに居を構える青年。多分20代後半だと思われる。

外見も能力も平々凡々……と思いきや、ツツコミにおいてはあらゆる存在を凌駕する。例えば相手が神だろうが悪魔だろうがそれ以上の存在だろうが、彼のツツコミは容赦はしない。

相手が生半可でないときにはあらゆる武器類を用いて過激にツツコミを入れる。その出所は様々で中には普通の人間は使えないはずの物もあるが、彼は難なくぶちかます。

また異様なまでに人脈が豊富で、様々な人間、神、悪魔、その他諸々と交流を持つ。大概はご近所関係だが、職業柄（外食系の店を任

されているらしい）知り合った者も多い。

常識的に見えるが存在自体が非常識な自称一般人、他称逸般人の主人公である。多分。

今更ながらプロローグ（偽）（前書き）

最初に言っておく！

.....おこないでね？

今更ながらプロローグ（偽）

風が荒野を駆け抜ける。

地に伏せる無数の鉄塊。かつては何らかの兵器であつたのだろうそれらは、無惨な屍を晒していた。

彼方に遠く雷鳴が響く。いや、砲撃の音なのだろうか？ この位置からは判別がつかない。

「……………で、俺は何でこんな所にいるんでしょうか？」

戦場跡の真っ直中に立つ、一つの影がある。

その姿を見たままに言えば、両肩に分厚い外套を纏い全身鎧を着込んだ騎士とも武者とも見える存在。しかしその全高は30メートルをゆうに超え、全身の各部からは金属の軋みや排気音らしき物が時折漏れだしていた。

明らかに 人工物。

その内部、ほぼ球形状の薄暗くてせまつくろしいスペースの中で、一人の少年が無然とした表情で呟いていた。

『あら？ 高町様からお話を伺っていませんか？』

少年の耳に響くのは鈴の音を転がすかのような女性の声。感情の波を押さえ、冷静さを保っているように聞こえるが、この声の主が突拍子もない性格である事を少年は重々承知している。彼はうんざりとした調子で返事を返した。

「突然ぶち切れた様相のなのさんフェイさんコンビ以下機動六課の面々に押し込まれて拉致られて、気付きゃ戦場のだ真ん中だ。何かなんだかさっぱりだってーの。呆然としながらもとりあえず【お前】と【コイツ】を喚んだけど、一体全体どうなってるんだ？」

モニターに映る彼方の光景を一部拡大してみれば、よく見知った大出力の魔法攻撃が連射されているようだ。一部では【管理局の白い悪魔】などと称されている知り合いの容赦なき殲滅戦に頭を抱えたくなるのを堪えて、少年は返事を待つ。

『ではご説明いたします。先日の事でしたが、管理局にて外界よりの救難信号らしき思念波が関知されました。調査の結果一個人が無作為に発したものと判明、管理外世界からのものであった事もあって、上層部は調査を見送る事にしたのですが……』

一瞬もつたいぶる。こいつがこういう反応をする時にはろくな事がないと、少年は眉を顰めた。

『たまたま管理局を訪れていた神界調査官ヒヤクメ様が個人的興味でその思念波を調べた所、思念波の主は「え？　これなんて異種陵辱系エロゲ？」といった感じの被害を被っていた事が判明し、それを知った機動六課の面々が激怒。総員即座に休暇届を叩き付け、ありったけの戦闘技術を持つ知り合いに声を掛けまくり引き連れて、該当世界に殴り込んだという次第です』

「あー、そりゃ……………キレルわなあ……………」

額に手をやって天を仰ぐ少年。そんな話を聞けばあの戦女神達が黙っているはずがない。彼女等だけではなくその知り合いのほとんどが激怒するであろう。

これであの何と言ったか、DATだったか、そいつらの命運は尽きた。塵も残さず、霊子の一片も存在する事を許されず、無へと帰する事だろう。

ああ、ボクは怒らないよ？　むしろ混ぜて貰いたいくらいさ。いいねえ、陵辱するのもされるのも……………

「黙れ不定形ナマモノ。勝手に人の脳に電波を飛ばすな」

『？　どうかなさいましたか？』

「…………いや、なんでもない」

あとで大十字一家けしかけやるなど一通り呟いてから、少年は表情を真剣な物に変えて意識を切り替える。コンソールを恐ろしい速度で弄り倒しながら、彼は再び口を開いた。

「ともかく情報が欲しい。前線はどうなってる」

『偵察用の式から送られてくる映像を廻します』

モニターの画面に新たな映像がいくつか投影された。その全てが凄惨な戦場の様子を写している。

いずれも一方的な、最早戦闘でない虐殺であった。

「我が名はイリーナ！ イリーナ・フォウリー！ 悪を断つ剣なり
っ！！」

「あたしの魔力が真っ赤に燃える！ 勝利を掴めと轟き叫ぶ！ ぶ
わくねっ、ドラグスレー……イヴぁ……」

「^{ブースト}強化！ あとはぶつけるのみ！」

「貴様にも味合わせてやる、^{ゼロ}虚無の恐ろしさ」何言ってんのよこの
駄犬……！！」「ぶげらっ！」

「……………誰だあいつらにスパロボ流行らせたの」
『あなたです』

一方的に不気味な怪生物らしきモノを蹴散らしていく知り合い達の
姿を確認し、少年はそーだよツらにゲーム貸したの俺じゃんとか
つくりと肩を落とした。

はつきり言っ先の戦乙女達と比べても引けを取らないような人間
ばかりだ。しかもあんな風にノリにノッてる状態ならば、生半可な
手段で止める事など適わない。

少年は俺来てる意味全くねえじゃねえかと思いつながらも、気を取り直して戦況判断を再開する。

「まあ相手に同情する気は全くないが、コイツのテストにやあ丁度良い」

『VHSでしたかハイファイでしたか、ともかく彼らの自業自得、因果応報というヤツでしょう。せいぜい我々の調整に役立って貰うとしますか』

「よし、デカブツが密集している所を割り出せ。主戦場を迂回して片っ端から叩く。ついでだから途中の雑魚も残らず喰らうぞ」

『おのこしはあきまへんえ、でしたか、こういう場合』

「なんかちがう……………む？」

高熱源反応。ほぼ同時に空を切り裂いて無数の閃光が襲い来る。

大出力のレーザー砲撃。しかも一点集中。普通ならば、それに耐える事などできうるはずはなかった。

だが無論、少年を内包せし鋼鉄の巨人は並大抵ではない。周囲の地面が溶岩と化す超高温の中、傷一つない漆黒の装甲を揺るがす事もなく平然と立っている。

視線を周囲に向けてみれば、十重二十重に四方を囲む大型敵性体の群れ。いつの間にやら先手を打たれ、こちらに進撃してきていたようだ。

「こちらのエネルギー反応に気付いた。……………まるっきりの馬鹿でもない、か」

『棒立ちの状態でしたから、いい獲物だとも思ってたんでしよう。手間が省けましたね』

嘗められたものだ。ただ啞然として棒立ちになってると思っただか。

ただかありんこの親玉でしかない貴様らごときが【我等】を傷付

けられるとも思ってたか！

”三人”は集う敵性体を見下す。それぞれが分かたれている状況ならばともかく、今の状態ならば上の空とて不覚を取るはずもなし、だ。それだけの自負がある。

それを分かるわけでもない敵性体の群れは、数で蹂躪せんと一気に彼らの元へ殺到する。四方どころではなく今日外左右全天を埋め尽くさんばかりのそれに対して

巨人は悠々と左腰に提げられた剣に手を掛け、一気に抜き打った。

衝撃。そして轟音。

ただの一閃。抜き打つついでにその場で一回転。それだけの動作で、殺到しようとしていたモノどもは粉微塵に吹き飛ばされた。

それだけではない、一度振るっただけの剣線は四方に衝撃波を生み出し、次手に備えていた後列までをも蹂躪する。結果、かなりの数の大型敵性体が戦闘不能に陥ってしまう。

一手。ただそれだけで、大型敵性体の戦線は崩壊した。

足りない。まったくもって足りない。この程度では自身の一族の最高傑作とも言える黒鋼の巨人には届かない。少年は不敵に唇を歪めると、振り抜いたばかりのこれまた黒尽くめの太剣を肩に担ぐよう操作。巨人の目で周囲を睥睨する。

彼方ではいくつもの竜巻が発生し、地表の軍勢を一気に蹂躪していく。あれはフェンさんか八神先生か、どちらにしろ知り合いの誰かであろう。彼らがどうにかなるはずがないと信じている少年は己の戦いに集中する事にし、巨人を悠々と歩ませる。

『先ほどより現地の軍組織であろう所から、こちらにあらゆる周波数で通信が入ってきていますがどうしますか？ いい加減ウザいのです』

「そうだな……こちら通りすがりの素浪人、義によって助太刀いたすとしても返しておいてくれ」

心底どうでもよさげに答え、少年はいきなりスロットルを全開に持っていた。

巨人の背後に爆発的な閃光が生まれ、その巨体は一気に加速する。

全身が押しつぶされそうなGの中、少年は歯をむき出す獣のような笑みを浮かべ吠えた。

「さあ、おっはじめようか!!」

これは、数多の世界を巡り、戦い続ける若き戦士達の物語

なんかでは決していない。

「「「「「「「意味ねえのかよこのプロローグ!?!?!?!?!」

「

だから始めから（偽）というておろうが。

今更ながらプロローグ（偽）（後書き）

格好よさげなオープニングを適当にでっち上げてみた。
全く違う話だよこんな内容じゃねえよ。

なおここに出てきた人物達は一部を除いて本編に出てくる予定は全くございません。とくに主人公っぽい。主人公じゃないし。
詐欺や誇大広告で訴えられてもおかしくないレベルですな。いいんだらうか？

そのいち（前書き）

これまでのお話ー！

「……この筆者が書いてる【思いつきを書き殴ってみる】シリーズ、読めや」

いきなり投げやりだなこの主人公！？

「いいんだよーせ中身なんかあつてなきがごとしの話なんだから」
酷いなオイ！？

つてなわけで、始まるよ？

そのいち

差し込む朝日。響く雀の鳴き声。

爽やかな朝であるが、目覚めは最悪であった。痛む頭に手を当てながら、むくりと起きあがる影が一つ。

「あたた……おっと飲み過ぎたか……」

二日酔いで判断力の低下した頭を何とか働かせて昨夜のことを思い返そうとし

周囲の光景に動きを止める。

力無く床に伏す複数の人影。それは全て 女性。

たわわな乳、豊満な尻、むっちりとした太もも。

それはもうおいしそーな女性たちが、無防備な格好ですうつと可愛らしく寝息を立てている。

リミッターが一瞬にして吹っ飛んだ。

「お嬢さん方ー！ ぼかーもー、ぼかーもー！ タマリマセンです
タイー！」

ぐわばっ、といきなりルパンダイブをかまそうとする黒髪ロングに
バンダナを巻いた美少女であったが。

「……うるせえ」

ハエ叩きのように振るわれた鉄塊に、アライモン殺してあえなく迎撃された。

実質的には5話なんだけど第1話
〜ぎゃくてんたいふーん〜

「……で、なーんでこんなことになったんだっけか？」

二重に痛む頭を押さえながら呻くように言うのは、Ｔシャツにスエツト姿の地味めな女性。

その目の前に正座させられてる黒髪娘の膝の上には、漬け物石。

「いやまってやなんでいきなりワイが原因って決めつけられてんの！？」

「他にこんなコトできるヤツがいるか？　この中に」

くいくいつと指し示す方向には……。

「女装どころかマジモンの女になっちまって……」

両手両膝をついてずんと落ち込む、へそだしシャツ姿のすんげえ美女。

「なんでこんなでかい乳……しかももっさり生えてるし……」

同じような格好で落ち込んでいる眼鏡の美女。

「うおでけー！　おれすっげー巨乳ー！！」

「いやはつきり言ってデブだろデブ」

「オレらも挟めるくらいはあるな」

自身の变化に大騒ぎしているぼっちゃり系とジャージ眼鏡とオールバック尻尾髪の三人。

「……貝のみそ汁くらいなら出来るか……店長、台所を借りる」

一人冷静に振る舞う浅黒い肌に銀髪の美女。

外見はともかく中身は異能とダメ人間の集団。その中にこんな芸当を成し遂げることが出来そうなのは……。

「おれしかいませんね分かります」

「つーわけで元に戻せ。ほれさつさと出すモン出さんかい」

「いやそんな言われて急にはいはい出るモンやないし……」

「しょうがねえなあ……ほれ」(むにょん)

「わぶをつ!? ふが、なぬお!?」

「今は一応本物の乳だ。堪能しろ興奮しろ。そしてぽこぽこ産め」

(むにゅむにゅ)

「ふおおおお! い、以外とポリウムが!？」

地味に混乱している最中、どたばたと騒がしい音が部屋の外から響く。

「せんせーせんせーなぜ部屋にいないでござるか早く散歩にイクでござるよ!」

「九朗! 妾を差し置いて朝帰りとは良い度胸だな!」

どがんと部屋のドアを蹴り開けて入ってきたのは忠犬(?) シロと銀髪ロングでふりふりワンピースのえらそうな少女。

二人はドアを蹴り開けた姿勢のままで部屋の中を確認し……凍る。

本来野郎どものたまり場となっているその部屋の中には、しどけない格好の女性ばかり。

一番目立つのが黒髪バンダナの美少女を自身の胸に押し付けるようにして抱いている地味目の美人。

部屋を間違えたのかと一瞬思う二人だが、その『嗅覚』があるものを捕らえる。

自身が心密かに慕う（本人以外にはモロバレの）相手と、自分の片翼とも言えるパートナーの気配。

しかしそれが感じ取れるのは両方とも女性だ。

戸惑いながらも頭脳はフル回転。そして導き出された結論は。

「浮気かああああ！！！！」
「はい？」

きょんとする部屋の中の女性陣。それを尻目にシロは半泣きになって霊波刀を発生させ、少女は殺す笑みで莫大な魔力を掌に集中させる。

「先生の匂いが身体に染みつくほどなにしてたでござるかナニでござるか！？ ぱっくりいつちゃったでござるか！？ おのれ先生の初めては拙者の初めてとれつつふあいなるふゅーじょんする予約が決定していたというのにうらやまけしからんそこへ直れ！！」

「くくくく……妾はおるか霸道の小娘や腐れシスターまでも毒牙にかけておいてまだ足らぬと申すか？ 折檻ではすまさん塵も残さず消滅させてくれる。……その前に、いつの間にやら現れた泥棒猫を、始末しておかねばなるまいなあ！」

そこには二匹の鬼が居た。すわりしょんべんものである。実際何人かちびつてそうだった。

皆が怯えるそんな中、地味な人は何のプレッシャーもないかのよう

に立ち上がり、すたすた歩いて。

「とりあえず落ち着け」

二人に拳骨がました。

「こ、これが先生イ!？」

「……た、確かに以前女装した時とそっくりではあるが……」

頭のたんこぶのことすら忘れ、ぽかんと目を丸くする二人の少女。
目の前には正座しているバンダナ美少女とへそ出し美女。もちろん
膝の上には漬け物石。

「あの、なんで俺までこのような……」

「保護者の管理責任。……さて状況は理解して貰ったと思うが」

地味な人は鼻を鳴らす。啞然としたままの少女二人はこくこくと頷

くしかなかった。外観はともかく霊波を探ってみれば一目瞭然。間違えようもない。

「やっぱりあれかあ……酔った勢いでやらかしてもうたんやるか？」

膝の上の漬け物石など気にした風もなく首を傾げるバンダナ美少女。その正体はアパートの住人が一人、永遠の煩惱少年 横島 忠夫 その人。

「それ以外にや考えられんわけだが……なんでよりによって女性化……」

溜息も艶めかしいへそ出し美女。

マスター・オブ・ネクロミノコン、へっぽこホームズ。大十字 九郎。

もちろんその他も全員元々野郎なわけで。

「いいな、アルたんいいな。断片で良いからわけてくれないかな」

物欲しげに指をくわえながらぶつぶつ呟くスエット姿の眼鏡美女。ロリオタプーの三重苦を背負ったダメ人間。大森 カズフサ。

「奥さんリアル合法ロリ人妻ですよ！？ 何コレNTRっていう神のお告げ！？」

「焦がされるからやめとけ」

「リアル獣っ娘はガン無視ですかwww」

ハイテンションとローテンションとマイペースの三人組。

近所のゲーム屋のオーナーでダメ人間仲間。ヒラノ、ジャージ、ヤブ。

「む、良い出汁」

みそ汁の出来に頬も綻ぶ銀髪のおねえさん。
元英霊現在アルバイト。エミヤ。

そして。

「ともかく事態を収拾せんとまたぞろ騒ぎになるなこりゃ」

地味な人。

我らが主人公。但野 人成。

一体全体どうしてこういう事になってしまったのか。
その原因は……。

時は遡り、前日の夜。

仕事上がりの人成は、職場のバイトであるエミヤを呑みに誘った。

「店長のアパートというのがあれだが……」

「今からじゃ大概の店閉まつてるからな。たまにやいいだろ」

コンビニで購入した酒と職場から持ち帰った食材で一杯やろうと途中の店に立ち寄れば。

「お、フサさん」

「あ、ナリ君」

早売りのジャプを立ち読みしていたカズフサに遭遇。どうやら相^{ちゃん}方が出かけていて暇だったようだ。
二人だけで呑むのも寂しいかと誘いをかけ、連れだってアパートの階段を上ると。

「し……死ぬ……」

「た……たすけて……」

行き倒れになっているバカ二人。バイト上がりの煩惱少年と相変わらずど貧乏生活のへっぽこホームズの、万年金欠コンビである。

乾いて飢えて無に還りそうな二人を見て、さすがに哀れに思った三人は、とりあえず呑みに誘ってみる。

飲み会と言うよりは飢えた獣に餌を与える会と化した但野邸。こりやうまいこりやうまいと餌をかつこむバカ二人に給仕する作業を続けていたら。

「……どやどやどや」

と本当に口にしながら乱入してくるバカがさらに三人。
コイツら普段は日柄日中自分たちの店でうだうだやっているはずなの
のだが。

「店のエアコンが壊れたんじゃあ文句あるかああああ!!」

「キレンなら帰れ」

「いやすんませんマジすんません入れて下さい涼ませて下さい」

というわけでせまつくるしいアパートの中、野郎だけの飲み会がな
し崩的に始まった。

で、酒も回れば口も軽くなってくるわけで。

「おまアレか? ふざけてんのか!? 二股どころか三股とかもげ
るよこのリボルビングチ こ!」

「うわこの人すげえめんどくさい絡みしてくるよ!」

「せめてアルたん譲ってくれないかな? かな?」

「男がやつても気色悪いわ! 大体アイツは俺のだ、断片たりとも
譲ってやらん危ないし!」

「なんでやああ! 富と女はやっぱイケメンへと集中するんか
あ!?! この格差社会が生んだ悲劇をどうすればよかですたい!」

「……お前が言うな」

「何で非難轟々!」

「金はともかくお前の周り女ばつかじゃねえか! 金はともかく!」

「説得力つちゅうモンがないわい」

「アレよりどりみどりだよな」

「……」

「……なんで黙んの」

「……手を出せないどころか、出したら確実に酷い目にあう事が分
かっている女性に囲まれているってのは、幸せなことなのでしょう

か？」

「うわなんか隣のブツダさんみたいな諦観の表情になったよこの子！？」

「いやどー考えても……」

「手エだすの待ってるよな連中」

「ぶつちやけモテてんじゃんお前」

「ふざけてんのか半分よこせやごるあ！」

「……………モテてるってのは事ある毎にしばかれたり包丁もって追い回されたり朝から耐久レースで引きずり回されたり狐火でこんがり燃やされたりその他諸々酷い目に遭うことを言うんでしょーか？」

「なんか膝抱えてかたかた震えだしたよ！？ 気持ち分かるけど」
「お前は言うなや。しっかりばつちり元取ってる分際で」

「……金銭的にはむしろ悪化している感じなんですが同居人的に考えて」

「フィギアとか二次元とかに入れ込んで金浪費するよりマシじゃね？」

「それもこれも金があつてのことだけだね」

「……………美少女のフィギュア大切にしたら、九十九神にならないもんかね？」

「……………うわこいつマジだ！？」

「あかんあかん、邪念が入ったたらむしろ呪いのアイテムとかになりまっせ？」

「呪いでもいいー！ この際呪いでもなんでもかまわないからつるつるえたーなる嫁をおおー！」

実にだめっばい連中である。

交代で調理をしていた人成とエミヤは顔を見合わせて、処置なしとばかりに肩をすくめた。

「ってそのおれたち関係ありませんって顔でエサ作ってる二人！
何すましてんの、おすましさんの!?」

「……………」

「あゝ!? なんですかそのうわこいつ超めんどくせーって言いたげな目は? 言いたいことがあったらはっきり言ったらどうですかア!?」

「「うわこいつちょうめんどくせー」」

「ぴぎゃー……!!」

絡んできたヒラノを言葉のナイフで迎撃してから、一通りつまみを作り終えた二人はどつかりと腰を下ろす。

ダメ人間ではあるが、この中で限って言えば比較的常識人であるジャージが「おつかれさん」とねぎらいの言葉をかけ、ビールの缶を差し出す。

「さすがは本職、手際がいいな」

「一応これでおまんま食ってるからな、文字通り」

「いや私は本職ではないのだが……」

当たり前だとも言いたげな人成に、無然とするエミヤ。揃ってビールを煽る二人に、いつも通りにやにや笑っているヤブが問うた。

「んでさ、お二人さんはどーなのよ。女関係」

ヤブの言葉に、エミヤは。

「女性関係、か……」

ふっ、とニヒルな笑みを浮かべて背を向けて

がたがた震えだした。

「うわなんか地雷踏んだ!？」

「トラウマになるほど何があったってんだ？」

顔を引きつらせたジャージとヤブは、人成の方を見る。一見エミヤのようなトラウマの発現など見せず、悠然とビールを煽っているように見えたが。

ビールの缶をテーブルに置いて、彼は一息つきつつ零すように言った。

「……………真つ当な女性とお知り合いになりたいです」

「すまんかった。いやマジすまんかった」

人成の周囲をよく知っている二人は平謝り。そりゃあの状況じゃまともな恋愛とかする気にはなれないわと、改めて思い直す。神も仏もあるものか、っていうかそういう方面じゃクソの役にも立たないしあの二人。

ビールを煽りつつ、人成はしみじみという。

「贅沢は言わない。……せめて人並みに炊事洗濯家事が出来る程度の常識人な女性はいないもんかなあ……」

「それ結構贅沢じゃね？」

「余計な技能持っている女なら多いんだけどね。非常識人も」

はっはっは。力無く笑う野郎ども。世の中はいつだって無情で虚しい。

と、何かに気付いたように立ち直ったヒラノがぶつぶつ呟きだした。

「人並みな家事技能……常識人……」

彼はくわ、と咆吼する。

「おめーらどつちか女になれやああ！！」

「あほかあああ！！」

指された人成とエミヤは即座に鉄拳をぶち込む。確かに並の女性より家事が出来るという自負はあるが、それとこれとは話は別だ。何が悲しゅうてわざわざ性別を反転させねばならないのか。

「正直もうそんな目に遭うのは勘弁して欲しいぞ私は」

「……なつた事あるんだ」

惘然として言うエミヤを気の毒そうな目で見る人成。この御仁本当に苦労してるなあ色々々と同情的な視線だった。

「……気持ちは分かる。すっげえ分かる」

「ああ、ワイも分かるなあ……」

へっばこホームズと煩惱少年もうんうんと頷く。こいつらも経験あるんかいと、人成は後頭部にでっかい汗を流す。まあ正確に言えばこの二人は女装させられた事があるだけなのだが、神ならぬ身に分かるわけもなかった。どっちにしる酷い目に遭っているのには違いないし。

「確かななあ……エミヤ君が女性だったらと、思わなくもない」

「店長まで気持ちの悪いことを言うな！ そっちの趣味でもあるのか！？」

「ないよ。ただ周りの女性と比較してみたらはるかにまともだと思うが」

「そうだな？ おれ間違ってないよな！？」

「お前さんは基本から最終まで間違ってる」

「なんだとう！？ だったら証明したらあてめーら女になっただけってー乾く暇ないかな！？」

いきり立つヒラノは、やおら背後からなにかを取出すと忠夫の前に突きつける。

「おらあさつきパチツた但野んとこのお宝じゃあ！」

「おおおお！？」

「てめコラいつのまに！？」

お宝本を目にした忠夫の霊力が一気に跳ね上がる。彼は世にも珍しい、煩惱に集中することで霊力を増幅させるタイプの能力者であった。その特異性はそこに留まらない。

ころんと、忠夫の掌からこぼれ落ちる光り輝く水晶球のようなもの。超高密度の霊気の塊であり、願いを込めればそれに対応した漢字一文字が浮かび上がりそれが示す現象を具現化する、理論上世界法則すらもねじ曲げる究極の霊的アイテム、【文殊】。現在人類では横島 忠夫ただ一人しか産み出すことの出来ない超レアアイテムであるそれを、無造作に拾い上げたバカは止める間もなく惜しげもなく使い潰す。

「おりゃあ見さらせえ！」

込められたのは【女】の一文字。そして文殊は太陽のような強い閃光を放って……。

「とまあここで皆様意識を失ってしまわれたのですよ」

「うん色々と待てウィンフィールド君」

持ち込んだモニターの電源を切り、むふんと自慢げに胸を張る執事に対し、たんこぶ作って意識を失ったヒラノを天井から逆さ吊りにしつつ人成はツツコミをいれた。

この霸道家執事が突如現れるのはいつものことだ、それはいい。しかし昨夜の出来事　人成たちがやらかした一部始終が録画されているというのはどういうことだ。

「盗さ……げふんもとい大十字様の行動を追跡調査していたからですが。主にお嬢様の命で」

「確信犯だなこのやろう」

さりげに自身が仕える主に責任をなすりつけようとするウィンフィールド。この男も最近はずっけけがましてくている。まあそれはそれとして。

「ともかく文殊の暴走によってこのような事態になったのであれば
解決策はやはり文殊を用いるしかありませんまい」

「いやそうなんやけど……さすがにこの状況で煩惱出てくるほどワ
イも無節操やないですよ？」

ウィンフィールドの言葉をばたばた手を振って否定する忠夫。彼は
確かに図抜けた煩惱の持ち主であるが、完全に空気が読めないほど
のあほの子ではない。（むしろ分かりにくいが結構気を配るタイプ
である）確かに必要ではあるのだろうが、今の状況ではいそいで
かと煩惱を高めるのは難しい。

「ならば拙者が一肌脱ぎ……」

「うん君がそれやると忠夫君本気で立ち直れなくなりそうだから止
めような？」

タンクトップをまくり上げようとするシロを止める人成。外見こそ
中高生に見える彼女だが、実年齢は一桁だったりする。それでま
かり間違つて煩惱が刺激されてしまったら……「ワイはロリやないん
やああああ！」などと血の涙を流しつつ転げ回る忠夫の姿が容易に
想像できる。そうなると邪魔だし鬱陶しい。

「ふ……妾に頼りなくなる気持ちは分かるが、これでも主に操を捧
げた身。おいそれとサービスしてやるわけには……」

「呼んでねえよ座つてろ」

自信満々に胸を張る少女を九朗が諫める。この少女もまた人間では
ない。九朗の相方にして伝説の魔道書【ネクロノミコン】が精霊、
【アル・アジフ】。こう見えてとんでもない年齢を重ねてきたロリ
バ……げふん大精霊である。

「えゝ、サービスないの？ それだけを楽しみにしてたのに……」
「だーっこれこの真性が！」

はつきり言っただけのサービスで喜ぶのはカズフサとヒロノと九朗くらいだ。生憎どれだけ色っぽかろうと忠夫は意地でも煩惱を高めたりはしないだろう。ロリではないというのは彼の数少ない誇りのだから。

誇るところが大規模に間違っているような気はするが、それはさておき。

「なるほど……では致し方ありますまい」

ふ、と呼気を吐くと同時にウィンフィールドの姿がかき消える。そして音もなく九朗の背後に降り立ち

「ほおら横島様、おへそから下乳の絶妙なラインでございますよ」

シャツに手をかけ、がばりとぎりぎりの位置まで捲り上げた。

「@ばいう y t g f れ w q ! ? 」

「ふおおおおおお！？」

突然のことに奇声を上げる九朗。ものすげええものを眼前に晒されて鼻血が出そうになるほど興奮する忠夫。

ぽんぽんぽんころころころ。

にわとりが卵を産むよりも容易く生み出される文殊。ウィンフィールドは良い仕事をしたとばかりに、爽やかな笑顔で流れてもいない額の汗を拭った。

「さ、これでよろしゅうございますね？」

「よろしくないよなんばしょつとかね!？」

顔を真っ赤にし、自身の軀を抱き抱えるようにして抗議する九朗。
どうでもいいが態度が完全に乙女と化している。無論ウィンフイールドは動じない。

「まあ大十字様は元々男性ですし。それにいつも腹筋を自慢するかのようにさらけ出していらっしやるではありませんか。ぱっくり頂かれたわけでもないのですからそんな生娘のような……失礼、生娘でしたな」

「いやそうだけどさあつれエ!？ これセクハラじゃねえけどおれ男だし!？」

にこやかに九朗をおちよくるウィンフイールドを見てもう放っておこうと匙を投げる一同。

ともかく文殊は精製されたのだ。ならばとつとこの馬鹿げた騒ぎを終わらせよう。忠夫は文殊を手にとってイメージを込める。

「【男】【戻】やったらええかな……と」

文殊の輝きが増し、内部にイメージ通りの文字が浮かび上がる。それを翳せば閃光弾のような光が発せられ、一気に広まり

「……あれ?」「」「」

「ちょ、アレエ!？ なんでや!？」

やっぱり美少女のままの忠夫が泡を食う。当然の如く、男性に戻った者は誰一人としていない。様子を見てふうむと顎に手を当てて考

え込む人成は、呟くように言う。

「もしかして……女性に変化したのではなく、『女性であつたのなら』という可能性が具現化してしまったのか？ 最初から女性であつたと言う事になるのだから、【男】に【戻】る事はできない、と」

しん、と静まりかえる室内。

「それなら……」とさらに考えを口にしようとした人成の言葉は、爆発的な大騒ぎにかき消される。

「どどどどどないすんじゃあ！？ 文殊が効かないんやつたらお手上げやないかああ！！」

「ちよつとウインフィールドさん！？ どうなつてんの！？」

「いやそこで私に振られましても」

「せめてロリに！ つるペタにしてええええ！！」

「また女性生活か……今回は戻れるのかなあ……」（遠い目）

「よしコイツボコな」

「風呂沈めようぜ風呂」

ぶらーんぶらーん。（失神中）

「大丈夫でござるよ先生！ 拙者女の子でも好きになれるよう努力するでござるから！」

「戻らない事前提かい！」

「なんと言つことだ。……妾より、妾より乳も尻も……おのれ！」

「問題そこかよ事件解決に向けて真面目に考えようよ！」

喧々囂々。好き勝手絶頂にパニくる面々。その耳には「だからさ……おーいちよつと聞け？」という人成の言葉も届かない。

ひよんな事から巻き起こつた予期もつかない災厄。果たして人成たちは、元に戻ることができるのか。無理か？

戻れなかった場合ストーリー展開とかどうするつもりだ筆者！ T
Sモノとして新機軸のつもりか筆者！？

波乱を含んで、次回へと続く！

「え？ 引つ張るんだこのネタ！？」

登場人物出典。

横島 忠夫、シロ…【GS美神極楽大作戦】より。

大十字 九朗、アル・アジフ、ウィンフィールド…【斬魔大聖デモンベイン】より。

大森 カズフサ…【ラブやん】より。

ヒラノ、ジャージ、ヤブ…【以下略】より。

エミヤ…【フェイト・ステイナイト】より。

そのいち（後書き）

初めてじゃない人はあまりいないと思いますが始めました。挨拶になつてねえぞオイ。

【思いつきを書き殴ってみる】シリーズからご覧になっている人はお分かりかと思いますが、この話はいいい加減と適当が9割、筆者の本棚および積みゲー1割で構成されています。

しかし書いてみてから気付いた。本来のクロス先の登場『神』物が欠片も登場してねえ。（汗）

さすがいい加減と適当が9割。やるな俺。

ともかくこんな感じでだらぐだぐだと続いていく予定ですので、お暇な方はお付き合い頂けると嬉しいです。

そのにー（前書き）

前回のお話ー！

「おにゃのこになってしまいました！ 以上！」

まあその……がんばれ？

「戻せや」

そのにー

緊迫した空気が流れる。誰かがごくりと唾を飲み込んだ。

す、と構えられる両手。細く頼りなく見えるそれは、しかし数々の奇跡を生み出した大いなる力を秘める。

それを構える本人が、額に汗を浮かべ真剣な表情で言う。

「……………パンとか葡萄酒とかになったら、ごめんね？」
「……………待ったらんかい！！」「……………」

続いちゃった第2話。

くりばーすちゃれんじ〜

「え？　だって私変化させるって言えばそれくらいしかできないよ！？」

いきり立つ集団を前にちよつとビビりながら言い訳するのは、人成の隣に住むロン毛こと聖イエス。こう見えて正真正銘のイエス・キリスト（の分霊）である。

「いや待てやキーやん、アンタ前にアシュタロスフルボッコにしたときにやあもつと色々やつとつたやろが！」

訳あつてイエスと付き合いの長い忠夫（　）がツツコミを入れる。
なんかえらく原作からかけ離れている台詞が飛び出したような気がするがそれはさておき。忠夫の問いに対してイエスは困ったような

笑みを浮かべて応えた。

「いやあの時は戦闘モード入っていたし、世紀末最後の仕事だったからつい張り切っていたからねえ。……今の状態ではちよつと」

「じゃあ今アンタ他に何が出来んだよ」

ふてぶてしく問い掛けるヒラノ（）。イエスは指折りながら答えていく。

「え〜つと……水の上歩けるでしょ？ 海割れるでしょ？ アガベ

ー高まると宙に浮かぶでしょ？」

「ホントに役立たねえなこのロン毛」

「そう言うお前はマジで神をも恐れねえのな」

べつと唾を吐くヒラノの態度に呆れ果てたという顔で言うジャージ（）。まあある意味文殊以上の奇跡をふとした拍子で起こしてしまつイエスなら元に戻せるかも、なんて期待は甘かつたわけだが。と、そこで様子を見ていたロン毛の相方がぽんと手を打った。

「あ、天部衆に頼んだら、プロデュース……もとい後付け設定でなんとかなるかも」

「連中のは後付け設定つーか魔改造でしょうが。やですよ三面六臂とか金色になったりとか」

やらせねえよとばかりに止めに入る人成（）。しゃらつととんでもないことを口にした相手は、パンチパーマっぽい髪型をしたお兄さん。

聖ブツダ。もちろん正真正銘の仏陀（高位分霊）である。

人成にツツコミを入れられ、ブツダはうーんと考え込む。

「私自身が女性化……って経験はほとんどないからねえ。途中で性転換ってのはさすがに……あるけど参考にはならないなあ」

「いや経験ある方がおかしいから」

さすが元祖無限転生者、なっちまったことがあるらしい。参考にならないのであれば意味はないが。

人成はふー、と息を吐いて、頭をぼりぼり掻きながら言う。

「流れに任せちまったが……別にアンタらに頼らなくても」

「くっくっくろおおおおおっくっくっくっくちやあああん!!」

台詞の途中で、がしゃあんとサッシ窓をぶちぬいて現れる影。しゅたりと降り立ちばさりとカソックの裾をなびかせるのは、やたらと胸のどかいシスターらしき人物。

【ライカ・クルセイド】。近所の教会で孤児院を営んでいる女性であり……九朗のお手つきの一人である。

「ら、ライカさん!? いやそのこれはちょっとした事情で……」
「ふふふふふ九朗ちゃんいいのよみなまで言わないでも分かっているわ」

やたらと怯え出す九朗。ごごごごとと言う効果音を背負ってなんだか凄味のある笑みを浮かべるライカ。周囲の人間はあっちゃあと額に手を当てたり十字を切ったりしている。

「いやのんびり見てないで助けてよ!？」

「いやだよ邪魔したら十文字にはっさりじゃねえか」

人成が指すライカの目はぐるぐると渦を巻いている。具体的には石

川ゲッターとか螺旋力な感じだった。逆らうだけ無駄である。

ライカ・クルセイド。普段は厳しさと優しさを兼ね備えたちよっぴりお茶目なシスターであるが……九朗が女装することに対して異様なまでに興奮しテンションを上げる、わりと変態であった。

「ふふふふ最初から女性であればもう遠慮することはないわさあ瑠璃さんもまつてるわよ綺麗に綺麗にしてあげるからねふふふふ」
「いやああああ放して助けて神様見捨てないでエ~~~~~!!」
「うんごめん無理」
「てかそれ私の台詞」

本当に神様から見捨てられた九朗は、ライカにずるずると引きずられながらフェードアウト。皆の頭の中にはドナドナが響いていた。

「さ、当面の問題は去ったところで、解決策を模索せねばなるまいな」

「相方放りっぱなしかよ」

何事もなかったかのようにフムと鼻を鳴らして話を戻そうとするアル。人成のツツコミに対し、彼女はくくくと邪悪な笑みを浮かべた。

「どうせ九朗は覇道の小娘の元で散々玩具にされるだろう。墮るところまで墮ち、絶望に満たされたところで、ひよい、と救いの手が現れたらどうなるであろうな。……くくく、飴と鞭は使い分けるものよ」

「うわあこの合法ロリ人妻おつかねえ」

「ヤクザの下っ端監禁してオタに洗脳したテメーが言うな」

ろくでなしばかりである。まあそれはそれとして。

「天部衆がダメだとすると……後は変化の術が使える系?」

「あ、だったらルシファーとかレパトリーすごいよ? 老若男女動物なんでもござれな感じで」

「それはようぢよも範囲内に入っていらっしやるんでしょうか?」

「あ、うん確かあったと思うよ。滅多に変化したことないけど」

「でもルシファーに頼むんだったら魂とか対価にしないといけないんじゃない?」

「うゝん最近契約規律とかどうなってるんだろ? 魂のレートってどれくらいだっけ?」

「魂に糸目はつけません。なんでしたらラブヤンのも抵当にいれま
す」

「人の魂勝手に質に入れんな」

ヤバげな方向に話を持っていくとするカズフサ。() その後頭部にさくりと踵落しがぶち込まれる。

ぶちかましたのはもちろんカズフサの同居人、ラブヤン。Ｔシャツにスエット姿のどう見てもそこの姉ちゃんだが、これでも一応正真正銘の愛のキューピットである。クソの役にも立ってないけれど。

「キーヤン様もコイツ甘やかさないで下さいよオ。すぐ調子に乗るんスから」

「しかしね、迷える子羊を導くのは私の使命なのだから……」

「すっげえ上司に絡むなや。あと迷える子羊を墜ちる方向へ誘導するのはどうかと思いますが」

女性になろうが何だろうが、今日も人成君のツッコミは絶好調です。

「で、メールでも伝えただけどフサさんこんな感じなんだわ」

「OK分かってるわアタイは一を聞いて十を知る女」

肩を竦めてはふんと鼻で笑う。そうしてからラブやんはずずいつとへたってるカズフサへと迫りその胸を鷲掴みした。

「へきやあ！？ いきなりなにするかねこの人は！？」
「黙れそしてなんだこれは」

座った目をしたラブやんは、ぐいぐいとカズフサの胸を揉みしだく…… ってか引っ張ってる。

「アレか、これはハリウッド進出を目指すあたしに対する挑戦か。よからうそのケンカ勝ったよこしやがってくれなさい」

「ちょ、やめやめ痛い痛い！ ちぎれるヘンな方向に目覚めちゃうううー！」

いつも通りに見えて、地味に混乱していたただけだったりする。まあ元がロリオタプーの三十路男には見えないスタイルと美貌なのだから分からないでもない話だが。

「知らなきゃ単なる痴態だよなあ。…… って何してんのヤブ」

先程から静かだなと思っていたら、何か携帯で動画を撮りまくっているヤブ（）。撮影しながら彼 今は彼女 はダルそうに応えた。

「んー、さつきからみんな隙が多いんで思わず撮影しておいた反省はしていない。…… 後で編集してDVDに焼いて捌く」

どーせ元に戻れば分かんねえだろうとほざく。くされ外道だった。

「……販売ルート開拓してやつから、5：5な」

くされ外道2号、爆誕。

「え、せめて6：4にしようぜ？」

「5.5：4.5。それ以上はまからん」

「ちっ、しゃあねえな」

「くおらそこ！ハリウッドセレブたるアタイに許可なく何しとるか！ 事務所通してちょうだい！」

後ろ暗い取引に対して、くわと咆吼するラブやん。あほな寝言をほざいているようだが彼女は大体いつもこんなものだ。くつたりするまでカズフサイづくっていたら混乱から醒めたらしい。

「つかアンタらなんでそんなに余裕なの。ふっーこー、もっと狼狽えたり絶望に打ち拉がれたりするモンでしょうが」

何処まで神経図太いんだコイツらと言いたげな視線を向けるラブやん。向けられた二人はいたって平常運転だった。

「まあアレだ。驚いたけど慣れりやどってこたない。その内何とかなるべエ」

「そういつこった。大体解決策なら」

「せんせえせんせえせんせえせんせえ解決策をつれてきたでござるよ！」

「ちよつとなんなのよ説明くらいしなさいよバカ犬！？」

なんか色々なモノをへし折る勢いでアパートの階段を駆け上がってくるシロ。その手には『人語を喋る九本の尻尾を持つ子狐』が抱え

られている。

すぽんと放り投げられるように空中へと躍り出た子狐は、そこではふんと煙に包まれ

しゅたりと降り立てば、その姿はブレザーベスト姿の中高生くらいの少女へと転じていた。

妖狐【タマモ】。かつて玉藻の前とかなんとか呼ばれていた九尾の狐……の転生体である。

転生した直後諸事情により忠夫にその命を救われ、紆余曲折の末彼の職場にて保護観察扱いされている妖怪であるのだが。

「ったくもー、一体なんだっていうのよ。人が食後の情眠シエスタとしゃれこんでいたところに。……ほんつと空気を読まないバカ犬なんだから」

ナインテール……とても呼べる髪型の髪をかき上げながら言うその態度は、かつて大妖と呼ばわれた面影なんぞ欠片もない。せいぜいが小生意気な美少女というところだ。

そんな彼女に対して、シロはジト目になりつつ言う。

「そんなことを言いながら、先生が大ピンチだと言った途端飛び起きたのはどこのどいつでござったかな？」

「ななななな何言ってるのよばっかじゃない？　ばっかじゃない！？　別に横島が心配だったとかそんなことは全然ないんだからね！　ないんだからね！？」

見事なまでの、ツンデレだった。

「それで、なんでこの子連れてきたんだ？　役に立つとは思えんが」

「無論変化の術を伝授させるためにござるよ?」

あっさりと応えるシロ。しかし周囲はがくりと肩を落す。

「あのねえ……子供のお遊戯じゃないんだから、そんな簡単に教えられるわけないでしょ?」

こめかみを指で押さえつつ、タマモが唸るように言った。しかしシロは引かない。胸の前でぐつと両手を握りしめ力説する。

「そこは特訓でござるよ! 拙者も特訓で大きくなれたでござる!」
「……あれ、そうだったっけか?」

実情を知っている忠夫がジト目になるが、思いこみの激しいシロの中ではそう言うことになっているのかも知れないと色々諦めた。

「大体一概に特訓と言ってもさあ……」
「時間がかかると言うことなら大丈夫でござる!」『せーしんとと
きのへや』があるではござらんか!」
「わざわざあのサルんとこ行けってかい」

某所にある元石猿が経営する修行場のことを言っているのだろうが、
そこまで行くのが大変だし、第一

「このメンバー半分以上が術の素質もない一般人なんだが」
「『ええ!?!』」
「なぜにアンタらまで驚くパンチにロン毛」

どういう目で自分らを見ていたのだろうか、とことん聞き出した
いような気はするが後にしておこう。ともかく問題を解決することが

先決だ。人成は溜息を吐いて気持ちを切り替えた。

「……つと、ところでエミヤ君はどこに行った？」

「そっぴやちよつと席を外すつて……」

「待たせたな」

背後からかかる声に振り返れば、そこには。

「……なにその格好」

伸びた銀髪を纏め、女性もののスーツに身を包んだエミヤ（ ）がそこにいた。異様に似合っている。似合ってはいるのだが。

「何でわざわざ女物を」

「いつ戻れるのか分からない……というか経験上戻れない事もあるのでな。こんなこともあるつかと用意していた」

「そりやまた用意周到なことで」

ついでにと言いながら、エミヤは下げていた紙袋をどさりと置く。

「適当に女物の服を見繕ってきた。使わないなら別にそれで良いが」

「メイド服！ メイド服着ようぜ！」

「コレより一回り小さいジャージつてあるか？ 体型変わつてつからずに落ちそうなんだよ」

「チャイナドレスとか女教師風のブラウスにスーツとかどーよ」

「……まあ好きに使つてくれ」

食い付きがいい三匹の様子に肩を竦めるエミヤ。それは良いがメイド服とかふりふりのミニドレスとかバニースーツとか、一体何を想定したラインナップなんだろう。ツツコミたかったが深く考えると

怖いことになりそうなんで自重する人成。

「用意良いのは悪い事じゃないけどな。……まあそれもあまり必要じゃ」

「キーやんブっさん！ 何か面白いことになってるって聞いたからとんできたんだけど!？」

「……またややこしいのが来た」

ずどどとアパートの階段を駆け上がってくる影。細い肢体、後頭部で二つに分けられ束ねられた輝く髪。はつらつとした元気が満ち溢れている感じの美少女が満面の笑みで駆けってくる。

「天下無敵の銀河美少女！ レディオス・ソープ!」

きゅぎつと目の前で立ち止まり、どどんとキメポーズ。そんな彼女に対して、人成は満面の笑みを浮かべこういった。

「帰って下さい」

「酷お!」

ががんとショックを受けたかのように大げさに仰け反るソープ。どうしてこの方はこの姿になるとあほさ加減が加速するのだろうと、考えても仕方のないことが頭をよぎるがそれはとりあえず置いておこう。いずれ心の柵が崩壊するかも知れないが。人成は癖になった溜息を吐きつつ口を開く。

「で、わざわざこっちに合わせて女装までしてきて何の御用でしょうか」

「女装はアタシんちのお家芸だい! ……っと、そんなことを言ってる場合じゃなかった」

ふふふふとどこか影の入った怪しい笑いを浮かべるソープ。アンタらの同僚だろうとパンチにロン毛の方を見れば、素知らぬ風を装って視線をそらしやがった。止めるつもりなど欠片もないらしい。

「そんな怪しまなくても、いい話を持ってきたんだってば。……元の身体に戻る心当たり、あるんだけどな？」

「……アンタ確か力の大半封印してるはずでしたけど、どうするつもりですか？」

もののスゴク胡散臭げなものを見る目で見る人成だったが、ソープは平気な顔でぴっと親指立ててみせる。

「大丈夫。すんごく腕の立つ友人にお願ひするだけだから。人造生命とか神様のコピーとか、人造女神とか誕生させちゃった実績持ちだよ？」

「世界最高峰の頭脳に何させる気ですか!？」

そりゃ性転換くらいかるーくやってのけるだろう。ついでとばかりに何か怪しい仕掛けとか仕込まれそうだが問題はそこではない。

「……んな大層なお方まで引っぱり出して……ただってわけじゃないんでしようが」

「ふふ……やっぱ気付くよね」

くすりと微笑んだソープ。その様相ががらりと変わる。

明るい少女のものから、世界全てを支配するような王者のそれへと。

「元に戻りたくば、我がものとなれ」

恐ろしいほどの、重圧。重力が増したような空気の中、少女の姿をした『何か』は言葉を紡ぐ。

「今よりそなた、その血を我に捧げよ！ 唯一人、我一人を主とし、我唯一人にその忠誠を誓え！ …… その見返りとして我が与えるは、世界最高最強の地位と装備と名誉と快樂！！ 力と恐怖！！」

「いりません」

「あつれエ！！？？」

空気がしおしおと収縮し、いつも通りのものへと変わる。威厳もなんもかんもすぽーんと消え去ったスープは、半泣きになりながら食って掛かった。

「ちよつとお！ ここは恐れおののきつつも絶対的な主を得て歡喜にむせび泣くところでしょう！？」

「慣れたかありませんでしたけど、どっかの邪神あほとかパンチとかのおかげでカミサマのプレッシャーには慣れてんですよ」

人成の背後では、パンチが視線を逸らして口笛を吹いていた。そういやこの人わりと沸点低かったなあと肩を落すスープ。さらに続けて人成は言う。

「大体勧誘の目的がツツコミ補充って時点で威厳も凄味も意味ないでしょうが」

「神にツツコミ目的で勧誘される人間ってのも大概だと思いが……」

ぼそりと呟くエミヤ。もし自分のツツコミ技能がもつと卓越したものであったなら同じように勧誘されていたのだろうか、ぞつとしない想像を浮かべる。良かった、ツツコミの英霊じゃなくて本当に良かった。わけの分からない安心感を得て、そつと胸をなで下ろす

エミヤであつた。

「……あたし、ここに通うようになってからカミサマのイメージがたがたと崩れてんだけど」

「大丈夫。拙者もでござる」

こめかみを押さえるタマモ。色々と何かを諦めた良い笑顔で親指を立てるシロ。ここでは色々と悟らないとやってはいけないと、周囲の人間もうつうつす気付いている。

「悟りの道は、こうやって開かれていくのですね……」

「なーんか色々と激しく間違っている気がするねんけど」

うんうん頷くブツダに対してぶつぶつ呟く忠夫だが、今更何を言っても無駄だろう。

世界はいつでも理不尽で無情だ。

「でもどうするのさ。そのままだと色々不便でしょう？ 元に戻る当てでもあるの？」

まだ諦め切れていないのか不満げな顔でソープが訊ねる。いや当てがないからこうやってと皆が思案中、人成はあっさりと言い放つ。

「だからあるんですってば、当て」

「……なにい！？」「……」

驚愕の声が上がる。いや当てがなかったらこんなに香気にしてないだろうよと、人成は内心呆れ気味だ。

「ちょ！ なんで最初から言ってくれへんの！？」

「言おう言おうとするたびに邪魔が入ったからだろうが」

だからここまで話のびのびになってんだよと、頭部にお怒りマークを浮かべている人成。そういやさっきから何か言いかけていたよ
うなと、皆後頭部にでっかい汗を流していた。

そんな空気を誤魔化すかのように、エミヤが問い掛ける。

「それで、いったいどのような手段を使うつもりだ？」

「あ？ 文殊使えばいいだろうよ」

は？ と全員の目が丸くなる。何を言っているのだろうこの男は。
確か文殊は

「全然効果なかったやないですか！？」

食って掛かる忠夫だが、人成は平然と、若干呆れたような表情で頭
を掻きながら言う。

「だからさ、【男】に【戻】るって概念が通用しなかっただけでよ

」

「【男】【性】【化】とかなら通用するんじゃないか？」

結局、あっさりと事件は解決した。

その際メイド服とか女物のスーツ着込んだヤツとかがそのまま男性に戻ったりしたおかげでこの世の地獄が顕現したりしたが、些細なことである。

なお。

「ふふふ女性化したおかげで身体のラインが顕わなエロい格好もOK。素晴らしいわ」

「さあ大十字さん、つぎはこのえっちいランジェリーですわよ」

「いやあああもうゆるしてええ！　もうS A N値がいっぱいいっぱいなのおおお！！」

どつかのへっぽこホームズがすっかり忘れ去られていたりするが、まあ些細なことである。

合掌。

登場人物出典。

聖イエス、聖ブツダ…【聖 おにいさん】より。

ライカ・クルセイド、霸道 瑠璃…【斬魔大聖デモンベイン】より。

ラブやん…【ラブやん】より。

タマモ…【GS美神極楽大作戦】より。

レディオス・ソープ…【ファイブスター物語】より。

そのにー（後書き）

キーやんの決め手は聖なる投げっぱなしジャーマン。
いや特に意味はありませんが。

青い鳥は実は自分ちにいた的なオチ。本当に神様役に立たねえこの世界。

立場的にドリフのコント並みな気がひしひしとします。

そのさんっ！（前書き）

前回のお話。

リア充もげろと思っていたら本当にもげました。ざまあwww

「うつ……もうお婿にいけない……」

お嫁にいけよへっばこホームズ。

そのさんっ！

事故とはいつも唐突に起こるものである。

後から思えば回避可能であつたと考えられるものも多いが、大概はその時予測できなかったから起こってしまうのだ。あの時こうしておけば、など考えるのは正しく後の祭り。いかに用心していても起こるべき時には起こる。

例えば交差点で赤信号を無視して突っ込んできたトラックが

「タイラントオーバーブレイク
虎王、乱撃ア！！」

自称一般人にどこぞの超機人の必殺技をぶちかまされて粉碎されてしまう、とか。

第三話です。が、なにか。

くかねーしょりんかねーしょん

「……咄嗟にツッコミ仲間のキョン君から教わった技をぶちかま

「なきや、危ないところだった」

「いやそれはおかしい。一から十まで」

ふうと安堵の息を吐く人成。そんな彼が珍しくツツコミを入れられている。それに対して彼は何を言ってるんだかと言いたげな感じで応えた。

「ビームぶちかまして粉砕するような連中に比べりや常識的でしょう？」

「すでにトラックを粉砕しようとする時点で非常識です！」

彼に食って掛かるのは名もなき警察官。何かえらい事故が起こったと通報があつてすつ飛んできてみれば、そこには平然と立っている被害者であるはずの人間と、加害者であるはずのスクラップと化した大型トラック。

「ツツコミも極めれば、これ位は容易いものです」

「自分の知ってるツツコミはここまで破壊力ないんですけどねえ！？」

この都市に転勤してきてから次々と常識が破壊されつつあるお巡りさんは、半泣きになりながら訴える。何平気で天使とか悪魔とかが闊歩してて素手でトラック吹っ飛ばす一般人とかが存在してるのホワイ！？ 神様助けて！（実はその神様が一番頼りにならない事をまだ知らない）

がつくりと肩を落す警官の様子に少し気が悪くなったか、人成は頭をぼりぼり掻きながら謝罪するような口調で言う。

「あゝ、すみません。こちらもう少し気が立っていました。何しろ

」

次の言葉に、まだ若い警官は戦慄を覚えた。

「これで五度目なもんで。無人のトラックに轢かれそうになるのは」

「というわけで金払ってやるから解決しろへっばこホームズ」

「お任せ下さいお客様。この大十字 九朗、全力を尽くして事件解決に邁進致しますよう！」

横柄な人成の言葉に対し、きりつとした顔で受け応える九朗。やたらと格好良く見えるが瞳の中に映る\$マークが全てを台無しにしている。

久々のまともな仕事。しかも浮気調査やペット探しなどではない探偵らしい仕事。さらにちゃんとした報酬付き。

「……俺はこういう仕事を待ってたんだよ」

天を仰ぎ、感涙にむせび泣く九朗。感極まっているその態度を見て、
人成はやや呆れ気味。

「才能はあっても商才のない典型的なタイプだな」

「まったく、おかげで食うにも困るありさまよ。腐れシスターがお
らねば今頃のたれ死にしていたのではないか？」

「助けてやれや原因の一端」

おんぼろなソファーに寝そべって煎餅をぼりぼり嚙りながら言うア
ルにツツコミ。この精霊様、本来は飲食を必要しないはずなのだが
なぜかやたらと飲み食いし、大十字探偵事務所のエンゲル係数を上
げまくっている。

まあもつとも、大十字 九朗が万年金欠なのはそれだけが原因では
ないが。

「とにかくくにも前金で10万、成功報酬が10万。経費は別途精
算……………特殊な消耗品も、な」

「ほう、大盤振る舞いではないか」

むくりと起きあがったアルが不敵に笑う。そして九朗も居住まいを
正し、視線を鋭い物に変えた。

特殊な消耗品 魔道書とともに、魔道師の秘技を行使される際に
使われる特製のアイテム類。それらは入手のしにくさ、製造工程の
困難などにより法外的なコストがかかる。物にもよるが、下手をす
れば小皿一杯でちよつと裕福なサラリーマンの生涯収入が吹っ飛ぶ、
なんてのはざらである。

『霸道財閥の専属』なんていうバックアップがありながら万年金欠
に喘いでいる要因がここにあった。

邪道の法にて邪道に挑む魔道探偵。彼の真の顔、真の価値は怪奇に
相対してこそ本領を発揮する。

「そつちの俺に頼むって事は、怪異がらみだって見当つけてんのか？」

「誰にも気付かれず、証拠も残さず、オレだけをピンポイントに狙って事故を起こそうとしてんだ。しかも紳魔の類がうるちよろして
るこの都市まちでな。どう考えたってオレみたいな一般人の管轄じゃない」

「いや一般人はトラック粉碎しないから」

そこはまあ置いておいて、確かにただごとではなさそうだ。見たところ人成本人には魔的靈的干涉の形跡は見受けられないが、常識的な手腕では決して行えない犯行だ。なるほど、どうやらこちらの領分に間違いない。

「OK、徹底的にやりましょう。俺の流儀でかまわないな？」

「ああ、全面的に任せる。頼むぜ魔道探偵……………いや、『旧神』エルダーゴッド」

かつて、邪神の作りし箱庭で足掻き続けた男がいた。

幾度も生まれ、幾度も死に、幾度も繰り返して。やがて彼は邪神の目論見を上回り、世界を超越して神座へと到る。

旧神。ただの人と精霊でありながら神へと成ったもの。あるいは生まれ変わり、あるいは同一存在を渡り歩き、それは永劫の旅を続ける。

ぱあん……ぱあん……。

「うわちよつと待つてあぶ、あぶ、あぶなっ！」

「だまれそして死ね邪神^{おっぱい}」

とりあえず邪神は見つけたらボコる方向で。

「つてなに出会い頭にクドウアぶっ放してくるかなあアルちゃん！

ボク今回まだ何もしていないんだけど！？」

「はあ？ この世界の神魔すら欺いて下らん策略を巡らす事が出来るのは貴様くらいしかおらんだろ^{駄乳}うが混沌の。まあ間違っていたとしても貴様自体が害悪なのだから何ら問題はないがな」

半泣きになって抗議する特殊な古本屋店主のおっぱい眼鏡 邪神

ナイアルラ・トホテップが分霊【ナイア】^{オートマテ}に対し、どでかい自動拳銃突^{ツッ}き付けてゴミを見る目で言い放つアル。多分に個人的な怨念とかなんかが見え隠れしているような気がするが、気のせいだろうきつと。

「さて小便の時間もお祈りの時間も部屋の隅でがたがた震える心の

準備もくれてやらん。往生際良く疾く逝くがいい」

「まあ待てアル、落ち着け」

殺る気満々のアルだったが、その行動は他ならぬ相方である九郎によつて留められる。ナイアはちよつと感極まった。

「く、九郎君？　ボクの事信じてくれるのかい？」

「ああ、ナイアさんの事は信じているさ。だから」

九郎はいやに優しい笑顔を浮かべ、ナイアの肩にぽんと手を置いて言う。

「正直に白状しようや、な？」

「全然信じてなかったああ！？」

今までの自分の行動を差し置いて絶叫するナイア。見事なまでの自業自得であつた。

それでも彼女はわたわた手を振り回しながら、懸命に自身の潔白を訴える。

「だからボクじゃないってばあ！　大体人成君にそんなことしたりすれば、ただじゃすまないって！　ただじゃ……………」

言葉が途中で途切れ、力無く腕を降ろして黙り込む。そして彼女は

がたがた震えだした。

「すみませんごめんなさいもうしません。むりですじゃしんでもそこはそんなふうにつくくようにはできていませんまがりませんまがり

りませんってば。びっくりどつきりぐるぐるまっしーんってなんですかねそれにはくはつながれるんですか。こんなにやくは、こんなにやくはだめです。こんなにやくだけはかんべんしてください……」

「あ、こりゃシロだわ」

震えつつレイプ目になって虚空を見詰め、ぶつぶつ呟きだしたナイアの姿に九朗は得心した。ここまで本気でトラウマってんのなら確かに下手な手出しはしようとしなйдらう。何をされたのか非常に気になるが所詮はナイアである。放っておいても良心は痛まない。

「この様子じゃ他のナイアさんも一緒か。つながりでアリス^{ヨ・ソース}もアザリン^トもシロ、と」

「アレらがいちいちここまで出張るものかよ。出てきたところでの逸般人に返り討ちに遭うが関の山だろうさ。……となると分からんな」

「ああ、邪神……旧支配者以外でこの世界に介入できる存在なんてそうそういない。いたとしても但野さんを狙う理由が分からない」

人成はああ見えても立場的には一般人である。ツツコミとかお仕置きに関しては神魔をも上回るが、余計なことをしなければそれなりに大人しい。危険を冒してまで手を出す人間ではないはずだ。

たまに懲りない連中が余計な手出しをしてたりするが、せいぜい過激なツツコミ入れられる程度ですますようにしている。もしも命を狙うような真似まですれば……そこで精神が崩壊しかけてる邪神^{あほ}みたいな目に遭わされるのは広く知れ渡っていた。地雷が埋まっていると分かっているわざわざ踏み抜くようなあほの子は、その邪神と筆者以外心当たりがない。

捜査は振り出しに戻ったかと、考え込む二人。こうなれば手当たり次第に当たってみるかなどと考えていたらば。

「……あの、ちよつといいかな？」

恐る恐るかけられる声。見れば何とか立ち直ったのか、少し顔色の悪いナイアがひよこつと手を挙げていた。

「なんだ持ち直したのか。………ちつ」

「露骨に舌打ちしないでくれないかなあ心が折れそうだよ。……それはそれとして、ちよつと心当たりがあるんだ」

「あ？」

コイツが何かを提案するとうるくな事にはならないと思いながら凄むアル。まあまあと宥めて、九朗は話を促した。今は邪神の触手でも借りたい。

「いやその……いなかっただけ？ 人成君に死んで欲しい神が」

「あ、そういえば」

いた、確かに容疑者になりそうなのが。ほんと手を叩く二人を余所に、ナイアは心の中でガッツポーズ。
これで生け贄が出来たと。

この都市には、神魔が集うその特性ゆえに天界、魔界のいわば『出張所』が数多く存在する。

その内の一つ、【ヴァルハラ地上支部】の玄関口が、激しく吹き飛んだ。

「ちょ、え？　なななな、なんですかああ！？」

受付嬢をやっていた見習い戦乙女^{バルキリー}たちが慌てふためく中、爆煙のなかからゆつくりと姿を現わす存在^モ。BGMはターミネーター2のアレ。

「やあこんにちわお嬢さん方。ちょいとレナス嬢に会いたいんだけどお取り次ぎ願えるかな？」

なぜかいつもの眼鏡の代わりに尖った凶悪なサングラスをかけたナイア。その後にくそこそとへっぽこホームズ&相方がついてくる。

「なんであんなに張り切ってたんだ？」

「さてな。……まあいざというときは全ての責任をなすりつけられるから好都合だが」

背後で外道な発想が生じているが気付いた様子もなく、ナイアはぬたりと嗤って受付に迫っていた。

「こ、ここは神聖なるオーデイン様が領域！　不埒者に便宜を図

る理由など」

「取り次がなかったら触手であへえとかめえとか言わす」

「すぐ呼んできます！」

ナイアの足下からうによように伸びてくる触手の束をみて本気だと悟ったのだろう、受付嬢どもは電光の速度で奥に引ッ込んだ。そして彼女らに背中を押されながら無理矢理表に出される女神が一人。

「なんでなんで私が！？　ちょ、押さないでエ！」

「すみません先輩！　私たちの幸せのために犠牲になって下さい！」

後輩に盾にされる形で押し出されたレナス・ヴァルキュリアは、引きつった顔で「い、一体どのようなご用件でしょうか！？」とどうにか対応しようとする。陰に隠され口元のみが三日月に歪んでいると知れるその貌ですいっと迫り、ナイアはねちっこい口調で問い質す。

「さてさて長々とお話させて頂きたいところだけど余計な手間をかけたらボクが存在とか尊厳とかがマッハでヤバいんで単刀直入にいくよ？　『但野　人成君に転生トラックを差し向けたか否か？』

YES？　NO？」

「へ？　あの？　転生！？　一体何のことですか！？」

「はっはっはしらばづくれるんじゃないよネタはちゃんと上がってるんだよ？　キミが人成君にさんざっぱら『死後の契約』を迫っていたのは知れ渡っているんだから。今のうちに素直に白状した方が後で酷い目に遭わされなくてすむかも知れないよひょっとしたら奇跡的に」

まるつきり難癖つけるチンピラの態度なナイア。それにしてもこの邪神、ノリノリである。

迫られてるレナスの方はといえば、まるつきり何が何だか分からないといった感じでおろおろしているだけだ。

ああ、ここも外れか。レナスの態度に嘘は感じられない。そもそもあの女神が回りくどいやり方で人成の命を狙うような真似をするだろうか？ 真正面からお願ひ死んで下さいと懇願するくらいはやらかすかも知れないが。

また振り出しかと肩を竦めるアルの横で、ふうむと考え込んでいる九朗。ややあつて彼は難癖をつけ続けているナイアに声を掛けた。

「このうにうにと蠢く触手が良いかイボイボがついててぐるぐる回る触手がいいか……ってなに九朗君？ イイ感じで商談が成立しそうでうなんだけど」

「後で存分にやってくれていいから、とりあえず聞きたいことがあるんだけど……転生トラックって、何？」

「あ、あれ？ 知らなかったっけ？」

あまりにも今更すぎて驚いた、といった感じで戸惑うナイア。もしかしてわりと有名な話なのかと眉を顰める九朗とアル。

まあメジャーどころはやらないんだけどと前置きして、ナイアは説明を始める。

「ぶつちやけ簡単に言つと……暇を持て余した神々の遊びつてヤツさ」

多次元世界にたゆたう神々の一部で、最近流行っている『遊び』がある。

適当な世界からめばしい人間を選び出し、無理矢理他の世界に転生させて放り込み、右往左往する様子を見て楽しむという、非常に悪趣味なものだ。

酷い話ではあるが、神様という連中はそもそも尊大でろくでなしなヤツが多い。人間なんぞ細菌以下かよくても駒程度にしか見ていないヤツなんぞざらであった。

そして今日もまた、哀れな犠牲者で遊ぼうと世界にちよっかいかけようとする神がいた……のだが。

「どうして……どうして^{リンカーネーション}転生しないのよオオ!!」

折角現地の神魔の目をかいくぐってテンプレ手段　転生トラックを送り込んでいるというのに、目標たる人間風情は小生意気にも全てはね除けていた。なんたる不遜。たかだか人間ごときが神たる自分の課した運命^{さだめ}に従わないとは。このゴミ虫が、貴様ごときは大人しく自分の思い通りに動いていればいいのだ。

キーボードらしきものを叩いてきーきー喚く神っぱいもの。当然その目論見はあっさりと瓦解することになる。

突如どがむと爆裂する空間。そして閉じた世界に風穴が空く。

「な、なにか!？」

「やあやお楽しみの所もうしわけないけど……『詰み』だよ」

「なるほど、隠蔽だけならこちらの神魔を上回るモノがあるか。:

しかし所詮それだけだな」

「あー、大人しくしてくんない？ 後が色々と面倒になるし」

ぞろぞろ現れる邪神と旧神。まさかバレるとは思っていなかった神もどきは、慌てふためいた様子で、それでもなんとか抗おうとする。

「おのれ、その能力を無駄にしか使わぬ邪神風情が！ 誇りを捨てて宿敵に下ったか！」

「たかだか隠れてこそこそクラッキングするしか脳のないどマイナー神がよく言うよ。しかも自分こそ陰気な遊びにしか能力使っていない引きこもりの癖して」

「分霊送り込んで堂々と遊んでいる邪神ひとには言われたくないと思うナー俺」

「それ言ったらあの世界の神ほとんどそんな連中な気が」

まるでネトゲに関わるダメ人間の評価のように聞こえるが、案外世界の真実とはこんなものなのかも知れない。

しかし相手も腐っているとは言え神は神。ぶわりと空間を圧倒する神気を放って戦う用意を始めたようだ。

「くく、名だたる邪神とは言えど、我が領域内ではその全力を発揮する事はできまい！ 成り上がりの旧神と共に退かせてくれるわ！」

「微妙に弱きな発言だなあ。……まあそれも無駄なんだけどね？」

「は、その傲慢こそが敗北の」

「いやちがくて。相手するのボクらじゃないし」

啞然とする神みたいなの。その視線の先、ぱたぱたと手を振っているナイアの背後で、九朗がすまなそうな顔をして言った。

神らしいのがその意味を理解するより先に、再び空間をぶち抜いて何かがすごい勢いで飛び込んできた。

V・MAX1700。逆輸入車にさらに手を加え、200馬力を軽く超えるパワーを持つに到ったそのモンスターマシンはウィリーする形で突っ込んできて

吹っ飛ぶ神（笑）。もんどりうつて倒れるその顔面に、ジャックナイフターンを決めたモンスターマシンの後輪が再びめり込む。そして。

「くあ z w x s で c r f v t g b y h ん ふ j m つつ！…！」

しばらくして、びくんびくんと痙攣する神だった何かを尻目にアイドリリング状態で九朗達の前に停車するV-MAX。駆っていたのはもちろんこの人。

「おつかれさん、良くやってくれた。報酬には色つけさせて貰う」

くくくと邪惡じみた笑い声を上げる人成。うわー絶対この人なんか色々やる気だと、ドン引きしながらこくこく頷く三人。別に神（残念）を庇う気なんぞ欠片もないが、哀れに思ってしまうのは間違いないのだろうか。

しかし、世の中は予想以上に非情で凄惨な運命を用意していた。

「なんかよけいなのが増えてるが……まあいい。ついでに小遣いもらっとけ」

「いや別に要らないんだけど……なんか気前がいいね？」

「ああ、コレからたんまり徴収するからな。余裕は出来る」

親指で背後の神ですがなにかを指す人成。アルは訝しげに眉を顰めた。

「どうするつもりだ？ そやつ金持ってそうにないぞ？」

「なに、コレも一応神だからな」

血……とか内臓とか、高く売れる」
「え」「」

一瞬で血の気の引く三人。それを尻目に人成は向き直り、両手を振るう。

現れるのはメスとか包丁とかノミとかのこぎりとか、とにかく凶悪そうな得物。それを両手の指全てに挟み、彼は哀れな得物へと迫る。

「ひ、ひびいいいいい！ たたひゅへへゆりゅひへいべう ばびびいいいいい！」

「あゝア？ 何言ってるのか分からんなアあああ！！」

只今リアルではぎ取りが行われています。しばらくお待ち下さい。

「いやあ大量大量。以外と採れたなオイ」

先ほどとうってかわって上機嫌な人成。身体のあちこちにこびり付いた赤黒い何かさえなければ爽やか好青年である。

足下にはかすかにぴくぴくいつてるモザイク入った肉塊。最早残骸としか言えないが、腐っても神は神、これでもまだ死なない。まだ死ねない。

しかし満足したような笑みでありながら人成はさらに追い打ちをかける。

「この様子ならばらくしたら再生するな。あと二、三回は採れるだろう」

ケツの毛まで筆どころじゃなかった。九朗たちはもはやへたりこんで寄り添いながらたがた震えるしかない。

世の中には、力の如何に関わりなく逆らってはいけない存在がある。身に染みてそれを理解した三人だった。

後日。

ほくほく顔で報酬を支払いに来た人成は、さらに九朗達に飯を奢った。

思った以上に儲けがでたかららしいが……折角の奢りなのになんか味がしないような気がする九朗であった。

あと焼き肉はやめれ。

登場人物出典

ナイア：【斬魔大聖デモンベイン】より。

レナス・ヴァルキュリア：【ヴァルキリープロファイル】より。

そのさんっ！（後書き）

ベビースモーカーなりの転生モノに対するアンチテーゼ……のはずがなぜかスプラッタに。

まあその、ラブクラフト的にはこういうオチで良かったのかも知れません。被害者と加害者逆だけど。

あと人成君の愛車は筆者の趣味です。エロ格好良いよなV・MAX。

そのばじーな いやくわとろ（前書き）

前回のオ！ おはなしィゃ！！

「目だ！ 耳だ！ 鼻だっ！！」

どしゅっ！ めぢめぢっ！ びしゃあっ！

「「ひいいいい」」ガクガクブルブル

コズミックホラー（笑）

そのばじーな いやくわとろ

夜空を流れる流星が一つ。

大気の熱に灼かれながら、それは未だ燃え尽きず。

それが抱くは強き意志。怒り、使命感、信念。ゆえにそれは未だ果てない。

「……死ねない！ 死ぬわけには、いかないんだあああ！！」

「……え？」

墜ちていく先に煩惱少年が存在したのは、最早予定調和だったとしか言いようがない。

ずがーん！ にぎゃー！

4話だったりして
めんず・れじえんど
漢たちの伝説

「さすがは横島さんなのね、普通は粉微塵じゃすまないはずなのね」
「じゃつかあしやあ！ 慰めになつとらんのじゃあ！」

包帯でぐるぐるまきにされてベッドの上に転がっている忠夫の傍らで、椅子に座りけらけら笑っている女性。

ボディスーツのようなぴったり身体にフィットした衣服を纏い、身体のあちこちに目を象ったアクセサリーを着けたこの女性、名を【ヒヤクメ】といい、れっきとした神族であつた。

名前からすれば妖怪のようにも思えるのだが、もしかしたら偽名なのかも知れない。見はりの神たるヘルダイム辺りが正体臭いが、まさか千手観音ではあるまい。

「ひ、神の正体勘ぐらないでほしいのね〜！ プライベートの侵害なのね〜！」

「……どこに向かって言つてんねん」

虚空に向かつてぶんぶか腕を振り回しながら抗議するヒヤクメを見て力無くツツコむ忠夫。どうせまた面倒事が起こるのは確定しているのだ、どたばたする気力なんか沸いてこない。

それよりも、だ。

「自業自得とは言え、職場の人間が誰も見舞いにこんっちゅうのは、結構響くなあ……」

こっそりほろりと涙する。まあ普段からセクハラしようとしたりあほな言動を取っていたりするゆえだろうし、どうせ死なないだろうと鷹を括られているのだろう。

……忠夫はそう思っていたのだが。

「ふっふっふ……おキ又ちゃん、どうあっても退かないつもりね？」
「美神さんこそ、普段が普段なんだから今更優しく接しようだなんて無駄ですよ？」

「そこを退きなさいばか犬！ 今日という今日は邪魔させるわけにはいかないのよ！」

「断る！ 先生の看病をするのは拙者の役目にござる！」

「令子ちゃん落ち着いぶべらっ！」

「主よー！ アパートでほっこりしてないでお助け下さいー！」

某所では、スーパ―お見舞い大戦が勃発していたりして。

「悪いけど、役得を堪能させてもらうのね」
「だからどこに向かって何を言ってるねん」

あらぬ方向を向いてぐふふと笑うヒヤクメに力無いツツコミを入れて、忠夫は溜息。そして少しだけ真剣な顔になった。

「ほんで、俺にぶつかって神様って、いったいどういうやつちゃねん」

そう、昨夜の事故 『突如空から何かが降ってきて忠夫に直撃する』という事故は無論自然現象ではない。天界にて発生したとある事件、その対処に当たっていた神族の一人が力尽き、地上に落下したため起こったものだ。

だがその神は現在姿を確認されていない。当然ながら腐っても神だ、地上に墜ちたくらいでは死ぬはずもないのだが、であれば一体どういう事なのか。答えは

「ああ、知ってると思うけどいだって……」
「また韋駄天かい!？」

怪我を忘れたかのようにがばりと起きあがって叫ぶ忠夫。そして彼は悶えながらゴロゴロとベッドの上を転げ回った。

「いややああああ！ もうパンーランニング姿でヒーローやるんはいやなんやああああ！」

かつて、とある事件のおり忠夫は韋駄天という神に取り憑かれたことがある。（原作参照）

どうやら今回墜ちてきた神は深いダメージを負っていたらしく、非実体化して冬眠状態に成らなければ存在が消えてしまうところであつたらしい。で、墜ちたところにいたのは過去に神憑きの経験がある忠夫。

一時的な抛り代としてはこの上ない。正しく渡りに船というか力モネギというか、ともかくこうして本人の意志に全く関わらず忠夫は再び神憑きになってしまったわけだ。

幸いというか何と言うか、取り憑いた神は休眠状態にあるため今のところ忠夫に対して何らかの影響が出ている様子はない。もちろんそんなことが慰めになるはずもなかったが。

「何とかならないの？ ネエなんとかならないのおおおお！？」
「そ、それを調べるために私が来たのね！ だからちよつと落ち着くのね怖いのね！？」

どばどば涙と鼻水を流しながら凄惨な形相で、ヒヤクメの肩を掴みがつくんがつくん揺さぶる忠夫。ダメなときはとことんダメなのねこの人と内心ちよつと退きながら、ヒヤクメは忠夫を宥めようとすると、病室の外からなにやら音が響いてきた。

どばたーんと開かれる病室のドア。そこから飛び出してきたのはカラフルなピンク色のミニスカナース服を纏った女性が三人。

小学生くらいの少女、なんかえらい恥ずかしがっている大学生くらいの女性、そして忠夫と同年代くらいの少女がそろってばしりとポ

ーズを決めて口上をぶちかます。

「あなたのカラダとハートを癒す白衣の魔族、アッシュシスターズ見参！」

「け、見参……」

訂正、恥ずかしがってる一人がズレた。

「ちょっと【ベスパ】！ちゃんと揃えないとダメじゃない！」

「そうでちゅよ、折角ヨコシマに会いに来られたんでちゅよ！」

「いやいくらなんでも恥ずかしいだろコレエ！それにアタシはヨ

……ポチの事なんかなんとも思ってたないって言ってるだろ！？」

「……ねえ知ってる？それツンデレの典型的な台詞だって」

「……ミカミとそっくりな言動パターンでちゅよね？」

「ちょ、違ってたってんでしょお！？」

「「あやしい……」」

「うわあん助けてー！」

疑いの眼差しを向ける少女二人に詰め寄られる女性。この三人、ちつこいのが【パピリオ】、でっかいのがベスパ、そしてスレンダーなのが【ルシオラ】といい、一応魔族の姉妹である。

とある事情により世界に対して反逆を企てた魔神、【アシユタロス】によつて生み出された造魔だったのだが……この世界で何か企むと言ふことは、すなわちギャグキャラに成り下がるということではない。そこをいまいち理解し切れていなかった彼はもちろんとてつもなく酷い目（具体的には一方的にボコられ最終的にキーンやんによつてKO）にあつて計画は頓挫。結果ルシオラたちはお役御免となつてしまい、諸々あつて姉妹は天界魔界人界にそれぞれ別れて生活することとなった。

その騒動のおり忠夫と出会って紆余曲折の最中交流を深め、結果パピリオは懐きルシオラは恋心を抱くまでになつてしまったわけだが……ベスパはそこまで忠夫と縁が深くなつたわけではない。最低でも本人はそう主張している。

まあ何とも思っていない相手に対して、恥ずかしい思いをしてまで元気づけようと思えるかどうかはとりあえず置いておいて。

「ルシオラー！ もうワイはたまらんの「怪我人は大人しくしとくのね」へびしゃっ！」

怪我を押して三人 正確にはルシオラに向かって飛び掛かろうとした忠夫の顔面に、にこやかな顔で容赦なく裏拳をぶちかましベツドへ叩き付けるヒヤクメ。顔は笑顔だが目は笑っていない。

他の者達に比べルシオラの好意の表現方法はストレートかつ忠夫本人に被害が及ばないためか、忠夫の方もまんざらでもなさげだった。その事に危機感を覚えているのは一人や二人ではない。ヒヤクメはふふふと不穏な笑みで三姉妹を見据える。

「三人とも今回の事件の捜査にまわされていたはずなのね？ どうしてここにいるのね？」

「ふ、愚問ねペス。そんなの決まっているじゃない」

「その通りでちゅ」

紆余曲折あつて一時的に捕虜にしペット扱いしていたヒヤクメを当時のあだ名で呼ばわりつつ、ルシオラとパピリオはびしすと指を突き付ける。

「「仕事さばってきたに決まってるじゃない」でちゅか」

「あ、アタシはこの二人に無理矢理引きずられてきただけだからね

！？」

弁明するべスパだがちよつとえつちいコスプレしてる時点で同罪だとヒヤクメは思う。要するにこいつら纏めて敵だ。

よかろう真つ向から叩き潰してくれるわと、なんだか妙なノリで不敵に笑うヒヤクメ。

「仕事をちゃんとしなのは感心しないのね。横島さんは私が調査ついでにちゃんと看病して置くからとつと戻ると良いのね」

「燦々百拍子！？」

言いながら忠夫を結構ボリユームある胸元へと抱き寄せる。その際なんかぐきよりと音がして忠夫が奇声を上げるが気にしない。どうせすぐ直る。

ヒヤクメの態度にかちんときて青筋を立てるルシオラ。見せつけてくれるじゃねえかこのやろう。それは嫌味か？ 宣戦布告か？ ちよつと乳あるからって調子こいてんじゃねえぞというオーラを背負い、つかつかとベッドに歩み寄って反対方向から忠夫を奪回せんとする。

「ごぎゃり。」

「身体がねじれる！？」

「ふふふふうちの上司は有能だから別にあたしがいなくても大丈夫なのよ。だからとつと消えてくんないかしらダ女神」

「（怒）」

めぎし。

「筋肉あれ！？」

「看病には母親のような包容力が必要なのね。格好だけで上辺を取り繕うなんて愚の骨頂なのね。ゼロには何をかけてもゼロなのね特に乳」

「（怒怒）」

がきゅい。

「肉体言語!?!」

「一度も忠夫からアプローチなかったくせに大きく出るじゃない。あるだけ無駄ね削ぎ落としたら?」

「……む……っ!」

「……う……っ!」

がきゅごりゅめじゃ。

「極限へ!?!」

「そこでちゅ退くんじやないでちゅよルシオちゃん!」

「ああ! ヨコシマのあらゆる間接があらぬ方向に! やめたげてよう!」

乙女達の戦いは際限なく続く。忠夫の多大なる犠牲を伴って。

その戦いに終止符を打ったのは、神も悪魔も等しくしばくこの男。

「おい忠夫君、生きてるか?」

がらりと扉が開き、果物の籠を下げた人成が現れる。そして彼の目に飛び込む光景。

人体の稼働枠の限界を超えた忠夫を挟んで睨み合う美女と美少女。その周りで騒ぐピンクのナース服。

介入者の登場により静まりかえる室内。それを一回り見回して、人

成は大きく頷いた。

「……ごゆるりと」

見なかったことにして扉を閉め、立ち去ろうとする。神も悪魔も等しくしばく人成であるが、恋に盲目となった女性に関わろうと思うほど無謀ではない。

が、その逃亡は必死の形相のベスパに遮られることとなる。彼女は扉に飛びつき全力で逃げようとする人成に縋り付いた。

「逃げるな人間！ この状況を何とかしやがってくださいませんか
このやろう！」

「オレが知るかオレを巻き込むなええい離しやがりくださいなさい
！」

テンパってるのか言葉遣いがおかしい二人。加速していくカオス。
捻れまくる忠夫。

騒動は、怒りの婦長が降臨し腕力にて場を制圧するまで続いた。

「……なんで入院してて体調が悪化すんのやろなあ……」
「……ごめんなさい」……」

遠い目で窓の外を見やる忠夫に平謝りする女性陣。その様子を横目
に人成はしやりしやりと林檎の皮をむいていく。

先のような騒動を見ていると本気で恋愛に希望が持てなくなる。人
成は強がりではなくそう思っていた。当然と言えば当然だろう、彼
の周囲でモテている人間は大概女性関係で酷い目に遭っている。知
り合いの中にはその事を妬み嫉妬するものもいるが、どこをどう見
たら羨ましく思えるのか。正直ハーレム状態なんぞデメリットしか
存在しないと感じる。

早いとこ忠夫も一人に絞ればいいのには思うが、同時にそう上手
く行くものでもないだろうなあとも思う。人間的に多大な問題を抱
えている忠夫周辺の女性陣であるが、反面魅力に溢れていることも
否定できない。言ってみれば選りすぐられた世界中の美食が目の前
に並んでいる状態で、どれか一つだけ選んで食していいと言われて
いるようなものだ。そりゃ悩む。んで、根本的にお人好しな忠夫は、
選ばれなかった食事の事も考えてしまうのだろう。難儀なことに。

「（ま、どんな道を選ぶかは忠夫君次第だろうがな）」

苦笑して思考を切り替え。皿に盛ったうさぎさんりんこの山を女性
陣の方へと差し出す。

「とりあえずコレでも食って気を落ち着けるんだな。騒ぎ立ててた
ら治るものも治らん」

「……重ね重ね申し訳ない」……」

「いやあの、それワイのお見舞いじゃあ？」

「女性優先。文句はあるまい？」

「……おっしゃる通りで」

自分だったら同じ状況に追い込まれば同じ事をする、いやもつと露骨に女の子に構うと分かっている忠夫は沈黙。自業自得かーとだくだく涙を流した。

とは言っても人成も本気で忠夫を放っておくつもりなどなく、次の果物を手に取り皮をむき始める。とそこで携帯の着信音らしき音が響いた。

「誰だよ病院で携帯の電源入れて……」

「……あ、ちょっとゴメン」「でちゅ」

「をいそこの姉妹ホンマはワイのこと嫌いやる？」

「あ、コレ携帯じゃなくて靈波通信機だから、病院に影響はないわよ。……はいこちらルシオラです……え？」

彼女と、同じように通信機に耳を傾けていた姉妹の顔に緊張が走る。

「……目標が現れて、現在交戦中！」「……」

状況は、風雲急を告げる。

衝撃。そして吹き飛ばされる身体。

魔界正規軍の士官にしてベスパの上司、【ワルキューレ】は強かに
廃ビルの壁へと叩き付けられた。

「か、はっ……」

肺の空気が全て吐き出され、ワルキューレはずるずると地面へ崩れ
落ちる。崩れ落ちながらも真っ直ぐに『敵』を見据え

「【小竜姫】！」

「はいっ！」

戦友に指示を飛ばす。

超加速。一部の神族や魔族が用いる時空間加速技法。通常が存在で
は認識不可能なそれを駆使し、ワルキューレに気を取られていた敵
の背後を取る女性。

霊山【妙神山】が管理人にしてパピリオの保護者、小竜姫。

若手の（というのも妙な話だが）神族の中でも名の通った剣の使い
手である彼女の抜き打ちが、フードのようなものを纏った敵を捕ら
えんと

「緩い」

「！？」

攻撃が、見えなかった。超加速などの技法を使ったのではない、純粹な速度とパワーだけで自分の反応と防御を上回ったのだと悟ったときには、ワルキューレと同じように周囲の建物へと叩き付けられていた。

まずい、予想以上だ。これでは次の手は切り札にならない。

「美智恵さん！ 逃げて！」

「遅いわ！」

小竜姫の警告は、しかし遅い。

フードの人物が腕を振るう。ただそれだけで、不可視の衝撃波が瓦礫の一角を吹き飛ばした。

「きゃあああ!？」

「……ほう、辛うじて防いだか。しかし一撃でその様子では、もはや戦えまい」

「……くっ」

瓦礫と共に吹き飛ばされ、よろりと身を起こす女性。【美神 美智恵】、忠夫の上司の母親にして公的の対霊的災害機関オカルトGメソンの現責任者であり、ルシオラの保護監督官でもある彼女は、電気を靈力に変換する能力を持つ一流の靈能力者でもある。今回の任務に置いてまずは情報収集をと考えていた彼女は、万が一のことを考えて某発電所から電力をちよぱって靈力をブーストしておいたのだが……その靈力も今の一撃で全て霧散してしまった。今の彼女はちよつと強いだけの人間にすぎない。

身を起こすのもやつとの三人を見下ろし、フードの人物はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「余の復活を祝う祭りがこの程度とは……実に下らん。食い足りぬぞ……む？」

フードの人物が何かに気付いたかのように顔を上げる。

「ばれちゃったから強襲の靈波砲連打あー!!」

雨霞と降り注ぐ靈力の弾丸。クラスター弾頭をもかくやと思わせるそれは、絶大な破壊力を周囲にまき散らかす。

「こらー姉さん！ やりすぎだろおー！」

「そうでちゅよ下手したらおばちゃん達死んじゃうところだったでちゅよ！」

「「「おばちゃん言うな!」「」「」」

攻撃に紛れて必死で三人を回収したベスパとパピリオが抗議の声を上げ、さらにパピリオに向かって三人が抗議の声を上げる。

その様子を見て上空から手加減なしの攻撃を叩き込んだルシオラはちっ、と舌を打つ。

「一緒にたに邪魔者を始末できるかと思っただのに……」

「「「「「確信犯!?!?!?!」」」」」

彼女の『敵』は姉妹ばかりではない、魔界の士官と竜の姫も超あやしい。ついでに某母親は娘たちをバックアップする気満々だ。しかもまだまだ数は多い。この機会に纏めて闇に葬り少しでも数を減らすそうと考えて当然だろう。ルシオラは平然と怖い思考を巡らす。こすっからい考え方は思い人から多大なる影響を受けているからなのかもしれないが、それはまあどうでもいい。問題は情念に任せて

かなり本気で放った霊波砲が

「……見た目だけか。こそばゆいわ」

全く通用していないと言うところだ。

爆煙がはれたそこには、全く無傷のフード。纏っているものこそぼろぼろになっているが、端からのぞく肉体にはかすり傷一つ見あたらない。

おかしい、事前情報ではここまで強力な『怨霊』ではなかったはずだ。確かに強力であつたが上級魔族に匹敵するルシオラの攻撃を食らって平然としているレベルではなかったはず。そこまで考えて、ワルキューレは気付いた。

「まさか『受肉』……貴様、抛り代を得たのか！」

「愚鈍が、今頃悟ったか」

鼻で笑うフードの男。その手がゆっくりと差し出され、虚空を掴むように曲げられる。

「馴染む、実に良く馴染む。まるで余のために用意されたかのような肉体よ。この身体と合一した事により余は往年の……いや、それ以上の力を得た。再び銀河の覇権を掴む。その時が来たのだ！」

「なんという事を……その身体を持ち主にかえしな……」

「非力！ それで余が止められるものかよ！」

無理を押して打ち掛かろうとした小竜姫と、それに合わせて攻撃しようとした魔族姉妹を纏めて吹き飛ばす。

そして男はずしりと一步を踏み出した。

「余の伝説はこれより再び始まる。光栄に思うがいい、うぬらはその最初の礎となるのだ」

溢れ出る闘気。物理的に叩きのめされ、さらに気圧されている女達はまともに太刀事すらおぼつかない。

このまま彼女らは圧倒的な暴力に晒される運命なのか。

否である。

「……………呼んでいる」

「へ？」

つどん！！！

「ひえアああああ！？」

「……………ちよつと席外していたら病室が消し飛んでいた件について」

「……来たか、我が宿敵」

歩を進めていた男が止まり、笑みの気配が漏れ出す。何事かと女達が訝しめば、天空より飛来する、何者かの気配。

それは、超高速でこの場に飛び込み、激しい衝撃波を放ちながら着地する。

爆風に晒されながら、クレーターを穿ったその存在を見やればそれは。

「……………横島」「……さん」君!？」

ゆらりと身を起こすのは、病室で転がっていたはずの忠夫。その気配はいつものものと違う。

圧倒的な威圧感。神々しいまでの闘気。それは間違いなく人間のものでは有り得ない。

「！ 憑依した神が、目覚めたというの!？」

小竜姫が驚愕の声を上げる。そう、宿敵の気配を察知した眠れる神が、忠夫の肉体を触媒とし今覚醒する！

その神の名は、いだ……。

「ビルド、アッッッップあ！……！」

「「「「「なにいい!?」「」「」」」」」

想定外の事態に目をむく女性陣。それを尻目に忠夫の身体が劇的な変化を始める。

吹っ飛ぶ上半身の服。肥大化した肉体に耐えられなかったのだ。

現れるのはまるでマスターグレードのガンブラのときカッティングの筋肉。そして逆立ち蒼く染まる髪。

それは数々の強敵を打ち倒した英雄神。銀河ボディビルコンテスト連覇の覇者。

みんながシビれる憧れる、兄貴の中の兄貴!

筋肉神

【イダテン】

大降臨!

「「「いだてん違エ!!??」」」

「……ちよつと格好良いかも知れません」

「……うむ、確かにな」

「その神魔正氣に戻つてエ!？」

背後で大騒ぎになっているのを放置して忠夫　いやイダテンは、己の肉体を誇示するようなポーズを取りながら、びしすと眼前の敵を指す。

「ふ……先日は世話になったつスな。我が隙をつき痛手を与えてくれた手腕、見事と言つておくつス。……しかし、同様に受肉した今のワスに同じ手段は通じねつスよ、我が宿敵……【ボ帝ビル】!」

「は、ははははは!　快なり!」

ばさりと宙を舞う布。

現れるのは、イダテンの倍はあるかと思われのような威圧感を魅せる鋼の肉体。

銀河に名だたる帝国を統べていた男。全銀河のプロテイン独占を目論んだ霸王。

冥俯の底より蘇りし、暴君の中の暴君!

筋肉皇帝

ボ 帝 ビ ル

大 復 活 ！

互いに己の肉体を誇示し対峙する二人の男。いや漢。
先制の動きを見せたのは、イダテン。

「最早油断も手加減もなしっス。ワスが持てる全ての力をもってお
相手するっスよ！」

ずば、と右手が天に掲げられ大きく開かれる。そしてイダテンは大
音声で呼ばわった。

「来たれ、我が力！ ……っス！」

どん、と落雷のごとき轟音と衝撃。それはイダテンの左右に分かれ
墜ち、盛大に爆煙を吹き上げる。

煙が晴ればそこに現れるは、阿吽像を思わせる二つの影。

イダテンに勝るとも劣らない肉体美。遍く光を反射し輝くスキンヘ
ッド。

筋肉神に付き従う、異様に頼もしい二人の舎弟！

オフション
従属神

アドン & サムソン

顕現！

「お呼びになりやしたか兄貴イ！」

「待ちかねてやしたぜ兄貴イ！」

天をも突くハイテンションでポーズを取りイダテンの命を待つ漢二匹。その間で雄々しくポーズを取りながら、イダテンはずば、と言
い放つ。

「さあ、ヤツに目にもの見せてやるっスよ！」

「是非もなし、相手にとって不足はない！」

応え吠えたボ帝。その腹部の筋肉が蠢く。

「ボ帝ビル、カッタアああああー！」

腹部の筋肉を凹ませ、そして膨張させる。ただそれだけの動作を超高速で行うことにより真空の衝撃波を生み出す絶技、ボ帝ビルカッター。

一撃にて高層ビルをも粉碎するその威力を前に、しかしイダテンは怯まない。

が、と傍らのアドンの肩に手をかけ

「アドン、シイイイルド!!」

「愛が痛いですぜ兄貴イ!」

容赦なく盾にした。

だくだく流血しながらイイ笑顔で意識を失ったアドンをばいっとそこらに放って、にやりと不敵に笑むイダテン。攻撃を防がれたと悟っているボ帝はすでに次の行動へと移っていた。

「ボ帝ビル、ブリッドオおおおお!!」

大気を掴んで圧縮し、砲丸の如く投げつける。範囲と威力はボ帝ビルカッターに劣るが、貫通力と速度に置いてはそれを上回る、これもまた絶技。

しかしそれも、今のイダテンには通用しない。

「サムソン、ホオオオオムラン!!」

「容赦なく敵いですぜ兄貴イ!」

「ぬう!?!」

咄嗟にサムソンの足首を掴んで大気の弾丸を撃ち返すイダテン。やっぱり流血しながらイイ笑顔で沈むサムソン。

予想外の行動に戦きながらも、ボ帝は血のたぎりを抑えられない。

「己の従属神を容赦なく使い潰すとは……修羅に墜ちたか」

「は、ウチの舎弟をナメるんじゃないやねっスよ。この程度で使い潰されるほどヤワじゃねっス」

あと5、6発は軽いつスよと不敵に言うイダテン。鬼畜生だった。

顎が落ちた状態でフリーズするしかないギャラリーの中、美神 美智恵はぼんやりと思った。

ピッチャー返しじゃねえのかよ。

いや違くて。

「（な、なんか……横島君みたいな戦い方ね……）」

そう、復活したイダテン。彼はどうやら捌り代たる忠夫に僅かながらも影響を受けているらしく、戦い方が微妙にこすっからくなってきた。

ある意味強化されていると言えなくもないが、それでいいのか筋肉神。

まあ相手にする方としては強敵が立ち塞がるのは望む所だったらしく、喜色を滲ませて豪快に笑っていたりする。

「ははははは！ 滾る、滾るぞ我が宿敵！ それでこそ倒しがいがあるというもの！ さあ、余が遙かな高みにいたるため、存分に相手をして貰うぞ！」

「上等っス！ 銀河に平和をもたらすため、お前との因縁ここで断ち切らせてもらっスよ！」

「……え、ちょ……」

「食らうがいい！ ボ帝ビルクスター！」

「なんの！ アドンパトリオット！」

「やるな！ ボ帝ビルハイメガランチャー！」

「さすがっス！ サムソンプロテクトシールド！」

「必殺！ ボ帝ビルソーラーレイ！」

「超絶！ ダブル男ねぶり！」

ずどがどぼかーん。 きゃー。

壮絶な戦いは、長時間に渡って続いた。

ぼろぼろの筋肉皇帝。倒れ伏す二人の従属神。巻き込まれてあちこちで埋まってる人神魔。

そして一人だけぴんぴんしている筋肉神。

「まだ届かぬ、というのか……」

「ははははは、素直に成仏すると言つのであれば、ここらで勘弁するっスか？」

苦悶の声を上げるボ帝と対照的に、背後に煩惱少年のオーラを滲ま

せながら勝ち誇るイダテン。しかしその降伏勧告は、ボ帝をいきり立たせる効果しかなかった。

死力を振り絞り、かつて銀河の覇権を掴んでいた男は起つ。

「ぬかせ！ このボ帝、退かぬ媚びぬ顧みぬ！ ついでに懲りぬ凹まぬ反省せぬ！ それが筋肉皇帝が誇り！」

「よくぞ吠えたっス！ ならば全力を持って勝負をつけるっスよ！ アドン！ サムソン！」

「……………」（白目むいてる）

「……勝負キメたら風呂で背中流させてやるっスよ」

「お任せくだせエ兄貴イ！！」

偉大なる兄貴の呼びかけに応え、二匹の漢は再び立ち上がる。満身創痍ながらも笑顔は絶やさぬ頼もしい舎弟の姿に頷き、イダテンはずは、と宿敵を指し示した。

「さあ、これでケリをつけるっス！」

「了解ですぜ兄貴イ！！」

「おおおおおおお！！」

猛り狂い突進してくるボ帝。三人の漢は最大最強の技にてそれを迎え撃つ。

「……メンス、ビイイイイイムア！！！！」

光がすべてを飲み込んで、そして……。

忠夫は再び病院のベッドに舞い戻った。

「し、死ぬ…… KONISHIKIがライダースを…… 骨が、ぽきぽき……」

うんうん呻く。さもありません、怪我が治りきらないうちにあちこち捻られ、その上で神に憑依されて大暴れ。はつきり言って生きているのがおかしいくらいの負荷が忠夫には掛かっていたのだ。

取り付いていた当の本人（神）はと言えば、宿敵をボッコボコにできて満足したらしく、あっさりと天界に引っ込んでいたりする。実に無責任な話だが神魔なんて大体そういうものだ。そこら辺はもう犬に噛まれたとも思っただけで諦めるしかない。

問題は。

「林檎が剥けやしたぜ兄貴イ！」

「あゝんしてくだせえ兄貴イ！」

なぜか忠夫の元に残っている従属神だ。
従属神

本来イダテンと共に天へと帰っているはずのアドン&サムソンだが、
どういうわけだか現世に留まっていた。

はつきりとした原因は分らないが、どうやら忠夫が憑依されている
間に召喚された関係で、忠夫自身と一種の契約が結ばれた状態に
なっているのではないかというのが関係者の見方だった。

どちらにしろ、忠夫にとってはありがた迷惑でしかない。

「気分が悪いんでしたら添い寝しやすぜ兄貴イ！」

「尿瓶の用意はできてやすぜ兄貴イ！」

「お願いですからもう帰ってください……」

そんな病室の様子を隙間から窺っていた人成は。
そつと扉を閉めて見なかった事にした。

なお。

「ああああ！　なんで増えてんのよ！」
「ええい怨霊の皆さん！　やっちゃってください！」
「みんな纏めて燃やし尽くしてやるんだからあ！」
「我が前に立ち塞がる全てのものを斬り伏せるでござる！」
「よし敵ね？　あなたも敵なのね！？」
「覚悟するでちゅ！」
「ちょ、あたしを巻き込むなああ！？」
「そこ！　仏罰食らわしますよ仏罰！」
「ワルキューレ、狙い撃つ！」
「見える！　私にも敵が見えるのね！」
「令子！　いい加減にしなさいロン毛公務員ミサイル！」
「なんの！　色々と薄い神父バリヤー！」
「「ぎゃあああ！？」」

某所では第二次スーパーお見舞い大戦が勃発したらしいが、わりとどうでもいい話である。

さらに。

「……………居候すらお見舞いに来ないってのはどうだろうなあ……………」
知らない間に悪霊^{ボ帝}に取り付かれた挙げ句フルボツコにされて入院する羽目になった大森 カズフサ（31）は、一人ベッドの上でしくしく涙するのであった。

登場人物出典

美神 令子、美神 美智恵、氷室 キヌ、ヒヤクメ、小竜姫、ワルキューレ、ルシオラ、ベスパ、パピリオ、ロン毛公務員、色々と薄い神父…GS 美神極楽大作戦。

イダテン、アドン、サムソン、ボ帝ビル…超兄貴シリーズ。

そのばじーな いやくわとろ（後書き）

シリアス装っていたのは冒頭だけ。後はいつも通りの酷いお話。

いだてんに取り憑かれたと聞けば、GSよりも小説版超兄貴を思い浮かべるのがベビースモーカーのクオリティです。

フサさんがオチなのは原作の関係。（作家が同じだったり）酷いキヤステイングだ。

というわけで皆さん一緒に。

もう、ダメだあ！

割り込み投稿だと更新しても誰も気付かない罫（謎）

そのふいふすうたはいいねエ（前書き）

前回の、お、は、な、し。

「兄貴オレ達のゴールは地平線ですぜ！」

「兄貴海が見たいの！」

「いい加減帰れアンタら」

横島君ちに居候が出来ました。

そのふいふすうたはいいねエ

開口一番、その怪物はこう宣った。

「僕と契約して、魔法少女になってよ」

.....。

「ちよつと待ったちよつと待ったちよつと待った。なぜにいきなりドリルを持ち出すのかなOK話し合おう」

「ほうなら試しに話してみる聞く耳は持たんが」

ぎゅいんぎゅいん回るごっついハンドドリルを手に、怪物を踏み付け凄む人成。もちろん殺る気満々である。

これが、【きゅうべえ】と名乗る不愉快生物^{ナマモノ}と、但野 人成との出会いであった。

「魔法少女ひとなり マジカ、始まるよ？」
「始まんねえよ」

5話じゃねえの？
「まーじまじ、まじすか？」

「やれやれ、ヘルメットがなければ即死だったよ」

「被ってなかっただろその赤い人ヘル。あと被ってる意味ないし」

穴だらけになりながらも偉そうに胸を張って言うきゅうべえ。(シヤアヘル装備) 忌々しげな表情ながら戯れ言に律儀にツツコミを入れる人成。

さてどうやってこのナマモノぶち殺そうかと、完全に抹殺する方向の人成の思考を読みとったか、きゅうべえはヘルメットを取り慌てたように言う。

「いやいやいや、多分こちらの手違い間違い勘違いなんじゃないかと思うんだよ。……もしかして妹さんとかいる？」

「姉ならいるが、まかり間違っても少女と呼べる年齢じゃないぞ？」

無然とした表情で言う人成の様子に嘘はないと見たきゅうべえは、小首を傾げる。

「……おつかしいなあ。最近この辺で極上の処女の気配を感じ取ってたんだけどなあ」

「……………いえつくしよい！……………」

とあるGS事務所と探偵事務所と赤い人のお屋敷とアパートの部屋

とゲーム屋で、くしゃみの音が響いた。

「不良品か。処分しよう」

「だから待って何そのでっかい大根下ろし白いけど添え物にならないと思うよ僕は!？」

「ああ？ 何贅沢言ってるんだ、すり下ろして便所に流すに決まってるんだろ？」

「完全犯罪キター!？」

無表情ながらも必死で大根下ろしを支えつつ、きゅうべえは訴える。

「いや間違えたのは悪かったけれど、僕まだそこまでヘイト入るようなコトしてないよね!？ なにゆえ抹殺対象になってるのかな!？」

「それが世界の選択だ」

「わけが分からないよかなり本気で!？」

ともあれ実際人成本人もなぜここまで殺意を抱くのか、実は良く分かっている。なんとなくこう、コレは抹殺しておかないと世界のためにならない。そんな気がひしひしとしているのだ。

何となくで殺意を抱かれている方としてはたまったものではないが。

「OK落ち着こう。ともかく誤解を解くために状況の説明をしたいと思うのだけれども話を聞いては頂けないでしょうか？」

「……………いいだろう、聞くだけならただだ。だがな」

言いながら、人成は部屋の隅からずるとある物を引き出した。
そしてその端つこから伸びている鎖の先端に付いた首輪を、がしや
りときゅうべいに取り付ける。

「えっと、あの、コレは？」

「天上下問答無用調教機、【びっくりどつきりぐるぐるびったん
まっしーん】。邪神ですらも五分で素直に言うことを聞くようにな
る素晴らしい機械の後継機種だ。貴様が不快な言動を取るたびにス
イッチ入れるからな」

「ど、動物虐待は犯罪だと思いますよ血も涙もないのかキミは」

「ぼちつとな」

「え、ちょ」

ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんびったんびったんびったん
びったんびったん！！

「……………申し訳ございませんでした。先の言葉は謝罪と共に
訂正させて頂きます」

「よろしい」

スイッチオン。

「え、ま」

ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんびったんびったんびったん
びったんびったん！！

「……………いやすまんつい押しちまった（笑）」

「わざとだねわざとだね！？　これ僕謝罪損だよ損失だよ訴える
よそして勝つよ！？　そんなんだから彼女も出来ない」

すいっちょん。

ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんびったんびったん
びったんびったん！！

「……………海よりも深く反省しましたから勘弁して頂けないで
しょうか。このままでは話が進みません」

「……………ちっ、しゃあねえな」

たしかに、ちよつと楽しくなってきたけれどこのままではぐだぐだ
に終わってしまう。いやいつも通りと言えばそれまでだが。とか考
えながら、人成はとりあえず話を聞くことにした。

で。

「宇宙の崩壊を防ぐためにやあ魔法少女になって魔女を倒さなきゃ

ならない、だと?」

「要約するとそういうことだね」

顔を顰めて言う人成に頷くきゅうべえ。結構長々と説明していたようだが、彼の言いたいことを纏めれば確かにそうなる。

人成は頭痛を堪えこめかみに人差し指を押し当てた。

「……なんでそんな胡散臭いモンにオレが引つ掛かるんだよ」

「そこが分からないんだよ。男性は最初から除外されるはずなんだけど」

「なんでバトル物で野郎が除外されるんだ?」

「そんなのは仮面か戦隊でやっておけばいいげふんげふん。思春期の少女が持つ色々とぐるぐる貯まった精神的なアレやソレな力を希望と絶望の相転移により次元連結的なちよつとした応用を施して、僕が与える魔法は発動するんだ。そもそも男性が使用できるようにはなっていない……んだけどなあ?」

「……まあ知り合いの魔法少女って連中も、大概戦闘能力は高かったが」

「いるんだ知り合いに魔法少女!?!」

がびびんとショックを受けるきゅうべえ。この星というかこの国は大概おかしいとは思っていたが、自分が生育する物以外にも魔法少女が居るのか。つかそんな簡単に知り合いになれるのか。

「わりと多いぞ?」

「多いの!?!」

どうなってるのこの世界のエントロピー。そんな簡単に魔法少女になれるのか。自分だってかなり手間暇かけて選抜を行っているというのに。なんだか敗北感に打ちのめされるきゅうべえだった。

そんなきゅうべえの葛藤など気付いたふうもなく、人成はさらに問う。

「それで、その魔女ってヤツは一体全体どういう存在なんだ？」

「ソウルジエムに蓄積された濁りが頂点に達したとき羽化する、魔法少女の最終形態……って」

はっと面を上げ、きゅうべえは戦く。

「ゆ、誘導尋問とはやるね!？」

「勝手にゲロったんだろぅが。まあそれはそれとして……」

す、と人成はスイッチを持ったままの手を挙げる。

「興味深い話だ。一切合切ゲロってもらおうか？」

「ちょ、まった」

ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんびったんびったんびったん
びったんびったん!!

……もちろんきゅうべえは全部吐いた。

「つまり希望と絶望という相反する精神エネルギーを高めるために、マッチポンプを行っている、と」

「左様にございますお代官様」

話を聞けば何のことはない、ただの詐欺だった。説明が面倒なので、詳しくは原作を見てみよう。

「詐欺じゃないよ!? ただ契約時に全て説明していないだけで!」

「それを詐欺つてんだよ。まあこんな不愉快生命体の言うことをまともに信じる時点でアレだとは思うが」

「キミも大概酷いことを言うね?」

きゆうべえに対しても魔法少女に対しても容赦ない。聞けば結構な被害者がでているようではあるが、その事に関して人成は眉一つ動かさなかった。

「詐欺に引つ掛かる方が悪い……とまでは言わんが、不用心にすぎる。神魔の事があるから契約を持ちかけられた場合は注意するよう、学校でも教えている筈なんだがな」

「そ、そうだったんだ。……でも以外だね、キミはもっと烈火の如く激怒するかと思ったんだけど」

「ああ、今までの質問は前振りだからな」

「ゑゝ」

ぞくりと悪寒を覚えて人成を見るきゆうべえ。人成の表情は穏やか

「…………汚された、汚されちゃった…………マミごめん、こんなにやくには勝てなかったよ……………」

ずたばろになって、生ゴミと一緒にゴミ箱に放り込まれたきゅべえ。心身共に完全に力尽きてる様子だった。一体何をされたんだろう。

なぜだ。きゅうべえは自問自答する。

本来であれば、きゅうべいという存在　魔法少女を魔女へと育成する^{インキュベーター}孵化器というシステムはこのようなコミュニケーションを取れるように出来てはいない。だというのになぜか、とんでもなく間抜けな人間のような反応を行ってしまう。

原因は分らない。分らないがきつかけは分かる。この部屋の主、但野　人成と接触してからだ。そこから全てが狂った。

何者だ。以前この辺りで察知した魔法少女候補の反応と何らかの関

係はありそうだが、男性である以上候補にすらならないはずだ。それとも何か特殊な事情でもあるのか。今一度ちゃんと調べてみる必要がある。きゅうべえはよりりとゴミ箱の縁から顔を出して、探查用の機能を起動。無数の人間の中からあらゆる方向性の視点で適格者を捜し出す全ての機能を用いて人成を視^みた。

視^みてしまった。

「すいませんでしたー！ー！！！」

ゴミ箱から飛び出しこれ以上ない『ふつくしい土下座』を敢行するきゅうべえ。人成はその姿を啞然と見るしかなかった。

そんな人成の反応を物ともせず、きゅうべえは畳に額をこすりつけていた。

「これまでのご無礼、ひらに、ひらにご容赦を！ 貴方様のような方にご迷惑をおかけしたこと、深くお詫び申し上げます！」

「あゝあの、え」と……」

今までの口先だけの言葉ではない、心の底から反省している様子のきゆうべえ。どうなつてんだと戸惑う人成。

「これよりは心を入れ替え、地球人類、いえ宇宙全ての生命にとつて真なる救済を探索し求道していく所存でございます！　まずは手始めに、この地球で私めが行いました愚行の後始末を。そして全ての罪を清算した後、今一度貴方様に断罪を請う所存にございます。私めのような愚物の存在など不敬の極まりですが、今少しお時間をいただけないでしょうか！」

「あ、ああ、そうなんだ……いいんじゃないの？」

「あ、ありがたい！　有り難いお言葉にございます！　それでは全ての決着をつけてくるまで、今しばらくお待ち下さい！　それでは御免っ！」

なんだかやたらと時代がかった言葉で言い放ち、きゆうべえは光の速さで部屋を飛び出していった。

ドアから首を出してその姿を見送り、人成は周囲にクエスチョンマークを浮かべる。

「アレはひょっとして……改心したってヤツなのか？」

どうしてこうなった。人成は疑問に思うがもちろん誰が応えてくれるわけでもない。当然ながらきゆうべえが何を見て改心したのか分かるはずもなかった。

こうしてまた一つ、世界の危機が人知れず救われたのだが……。
ま、良くあることである。

「それにしても改心って……聖人じゃあるまいし……？」

何か隣のドアから顔を出したパンチとロン毛が、仲間になって欲しい。そうにこっちを見ている。仲間になりますか？

「……………こっち見んな」

登場人物出典

きゅべえ…魔法少女まどか
マギカより。

そのふいふすうたはいいねエ（後書き）

棚にも積みゲーにもないのにまどか マギカ参戦。どこまで節操ないんだこの筆者。

きゅうべえ君絡んじやいけない人に絡んじやいました。事前調査は大事ですというお話。そりゃま詐欺師が知らずにヤクザに絡んだらこうなるわな。

で、今回の話の中に出てきたびっくりどつきり（略）まっしーんですが、実は神造兵器だったりする驚愕の裏設定。制作者は飛翔の方で神に到ったキ印の方。ちなみに似たようなモノでどこぞの孤児の名を持つ魔王が制作した『ボンバー君シリーズ』なるものも存在するそうです。

え？　こんにやく？

……………タダノコンニャクデスヨエエウソジャアリマセントモ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720w/>

ばちあたりアパートメント ~ザ・ごった煮ワールド~

2011年11月20日16時42分発行